お　かさ　ぎ

小　笠　木

—脇山B遺跡第1次、志水A遺跡第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第425集

1995

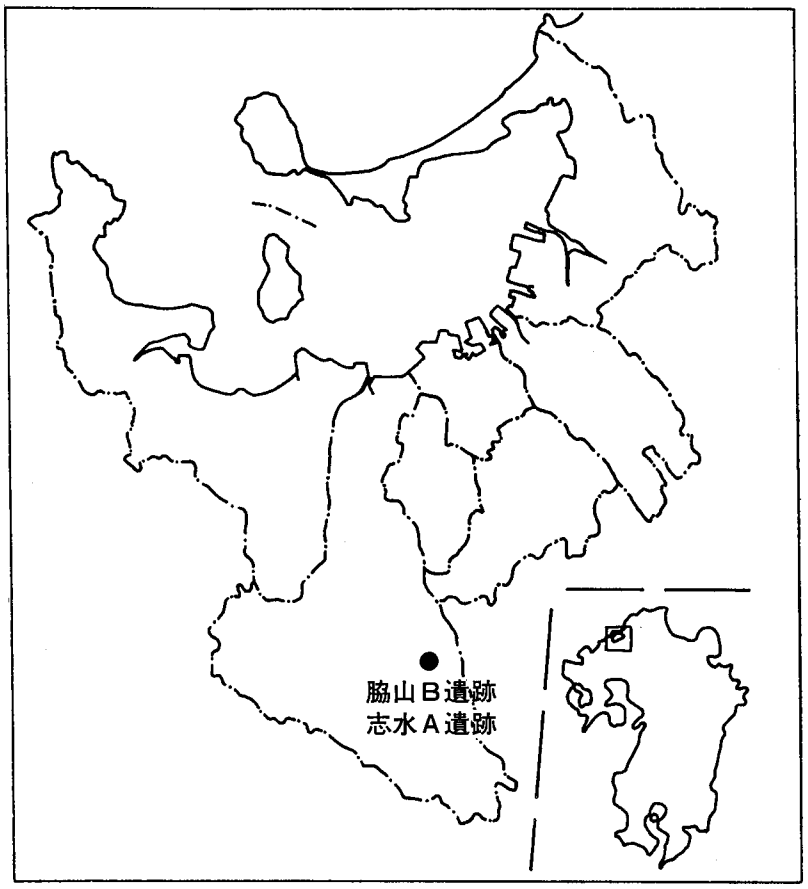
福岡市教育委員会

O KASA GI

小笠木

－脇山B遺跡第１次、志水A遺跡第１次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第425集



遺跡名	遺跡略号	調査番号
脇山Ｂ	WKB-1	9370
志水Ａ	SMA-1	9371

8322

1995

福岡市教育委員会

巻頭図版

1993 年度小笠木地区圃場整備事業地（南東上空から）

序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、子孫に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市像」を目標のひとつとしてまちづくりを行なっています。

しかし、近年の都市開発事業によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であります。このため本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は早良区小笠木地区の土地改良整備事業に伴って調査した脇山Ｂ遺跡及び志水Ａ遺跡の成果を報告するものです。今回の調査によって同地区の歴史を解明する上での数多くの貴重な資料を得ることができました。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、御理解と御協力を賜りました数多くの方々に対し、心から謝意を表します。

平成７年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　尾　花　　剛

例　言

1．本書は小笠木地区団体営土地改良総合整備事業に伴い、福岡市教育委員会が1993年７月から10月にかけて発掘調査を実施した脇山B遺跡第1次調査及び志水Ａ遺跡第1次調査の報告書である。
2．本書に掲載した遺構実測図の作成は榎本義嗣・黒田和生・英豪之・平川史子・山田ヤス子が行なった。
3．本書に掲載した遺物実測図の作成は榎本・黒田が行なった。
4．本書に掲載した遺構及び遺物写真の撮影は榎本が行なった。なお、空中写真の撮影は(有)空中写真企画による。
5．本書に掲載した挿図の製図は榎本・黒田が行なった。
6．本書で用いた方位は磁北で、真北より6°21′西偏する。
7．遺構の呼称は掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、焼土坑をSX、谷をST、ピットをSPと略号化した。
8．遺構・遺物番号は各遺跡ごとに通し番号とした。なお、挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
9．本書に関わる整理・作成作業は国庫補助を受けて行なった。
10．本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
11．本書の執筆・編集は榎本が行なった。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至る経緯……1
　2．調査組織……1
Ⅱ．遺跡の立地と環境……2
Ⅲ．脇山Ｂ遺跡第1次調査の記録……6
　1．調査概要……6
　2．Ａ区の調査……6
　　1）概要……6
　　2）遺構と遺物……6
　　(1)土坑……6
　　(2)焼土坑……8
　　(3)その他の遺構と遺物……8
　3．Ｂ区の調査……10
　　1）概要……10
　　2）遺構と遺物……10
　　(1)土坑……10
　　(2)その他の遺物……11
Ⅳ．志水Ａ遺跡第1次調査の記録……12
　1．調査概要……12
　2．Ａ区の調査……12
　　1）概要……12
　　2）遺構と遺物……15
　　(1)土坑……15
　　(2)焼土坑……15
　　(3)その他の遺構と遺物……15
　3．Ｂ区の調査……15
　　1）概要……15
　　2）遺構と遺物……16
　　(1)焼土坑……16
　　(2)その他の遺構と遺物……16
　4．Ｃ区の調査……18
　　1）概要……18
　　2）遺構と遺物……18
　　(1)掘立柱建物……18
　　(2)焼土坑……18
　　(3)その他の遺構と遺物……18
　5．Ｄ区の調査……20
　　1）概要……20

2）遺構と遺物……20
(1)土坑……20
(2)焼土坑……20
(3)その他の遺物……20
Ⅴ．結語……21

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図(1/50,000)……3
第2図　小笠木地区圃場整備年次事業地及び周辺遺跡群(1/10,000)……4
第3図　脇山B遺跡第1次及び志水A遺跡第1次調査区位置図(1/4,000)……5
第4図　脇山B遺跡A区遺構配置図(1/300)……6
第5図　A区遺構実測図(1/40)……7
第6図　B区遺構配置図(1/300)……9
第7図　B区遺構実測図(1/20、1/40)……10
第8図　A区及びB区出土遺物実測図(2/3、1/3)……11
第9図　志水A遺跡A区遺構配置図(1/300)……12
第10図　A区遺構実測図(1/20、1/40)……12
第11図　B区遺構配置図(1/400)……13
第12図　B区遺構実測図(1/40)……14
第13図　A区及びB区出土遺物実測図(1/1、1/2、2/3、1/3)……15
第14図　C区遺構配置図(1/300)……16
第15図　C区遺構実測図(1)(1/100)……17
第16図　C区遺構実測図(2)(1/40)……18
第17図　D区遺構配置図(1/300)……19
第18図　D区遺構実測図(1/20、1/40)……19
第19図　C区及びD区出土遺物実測図(1/2、2/3、1/3)……21
第20図　田中城跡平成4年度調査遺構実測図(1/300)……22

図版目次

巻頭図版　1993年度小笠木地区圃場整備事業地(南東上空から)
図版1　脇山B遺跡　(1)A区全景(上空から)　(2)B区全景(上空から)
図版2　脇山B遺跡　(1)A区SK005(東から)　(2)A区SK007(北から)　(3)A区SK008(北から)
図版3　脇山B遺跡　(1)A区SX001(西から)　(2)A区SX001土層(北から)　(3)B区SK052(北から)
図版4　志水A遺跡　(1)A区全景(上空から)　(2)B区全景(上空から)
図版5　志水A遺跡　(1)C区全景(南東上空から)　(2)D区全景(上空から)
図版6　志水A遺跡　(1)A区SK051(西から)　(2)A区SX052(東から)　(3)B区SX003(西から)
図版7　志水A遺跡　(1)B区SX006(南から)　(2)B区SX007(西から)　(3)B区SX010(東から)
図版8　志水A遺跡　(1)C区SB101(上空から)　(2)C区ST103(西から)
図版9　志水A遺跡　(1)C区SX102(西から)　(2)D区SX151(北から)　(3)D区SX152(北から)
図版10　(1)脇山B遺跡出土遺物　(2)志水A遺跡出土遺物

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

1993年度(平成5年度)から1995年度の3ケ年にわたる早良区小笠木地区における団体営土地改良総合整備事業の初年度該当地内の埋蔵文化財事前調査願が福岡市農林水産局農業土木課から同市教育委員会埋蔵文化財課に1992年11月2日に提出された。

これを受けて埋蔵文化財課では該地が脇山B遺跡及び志水A遺跡に含まれることより同年11月27日から12月7日に初年度事業対象地7.1haを対象として81箇所の試掘調査を実施した。その結果、全般に現水田造成時における削平が著しいことが判明したが、削平の比較的少ない一部の田面肩部側において焼土坑、土坑、ピットの存在を確認した。

その後の両者の協議において遺構確認域の道路・用排水路等の構造物及び切り土田面施工箇所について発掘調査を実施することとなった。調査は1993年7月13日から10月2日に行なった。

なお、1994・95年度事業対象地についても同様の試掘調査を事業前年度にそれぞれ実施したが、棚田造成時の著しい削平が広範囲に確認され、数基の焼土坑を除いては遺構の存在は認められなかった。また、出土遺物も皆無に等しく、遺跡のひろがりは両事業地内において看取されないため調査には至っていない。

2．調査組織

調査委託：福岡市農林水産局
調査主体：福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括：埋蔵文化財課長　折尾学
同課第1係長　横山邦継
調査庶務：同課第1係　中山昭則(前任)　内野保基
事前審査：同課主任文化財主事　井澤洋一(前任)　濱石哲也
同課文化財主事　吉武学(試掘担当、前任)　長家伸
調査担当：同課主任文化財主事　濱石哲也
同課第1係文化財主事　榎本義嗣
調 査 員：黒田和生　英豪之
調査協力：広瀬梓　細川友喜　岩見敏子　因ヨシ子　岡部喜久美　緒方シマヨ　川島ツキエ　倉光アヤ子　小柳和子　榊スミ子　岳美保子　鶴田喜美枝　中園登美子　平川土枝　平川富美子　平川伸子　平川史子　満田雅子　山尾タマエ　山口タツエ　山田ヤス子　吉岡勝野　和田裕美子
整理作業：西島信枝　日名子節子　松尾真澄

なお、発掘調査が無事完了できたのは多数の作業員、農業土木課、土地改良区の方々の御協力の賜である。深く御礼申し上げたい。

II. 遺跡の立地と環境

玄界灘に北面し、背後に脊振・三郡山系をひかえる福岡市にはこれらの山系より派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開する。西から今宿、早良、福岡、粕屋平野と呼ばれ、古くから地理的、歴史的に独自に環境を有している。

今回報告する脇山B遺跡、志水A遺跡は早良平野南端部の扇状地に面する山麓、丘陵上に位置する。早良平野は西側を脊振山系から北に派生する飯盛・長垂山塊に、東側を油山山塊によって区切られ、平野の中央には室見川が博多湾へと北流する。この平野は早良平尾地区を要部とする扇形を呈し、その南側深部の脊振山麓には室見川の支流である小笠木川、椎原川によって形成される小扇状地が展開する。脇山B遺跡はこの扇状地端部と小笠木川を挟んで北側に対峙する油山山麓の南側斜面上に位置する。また、志水A遺跡は脊振山系より扇状地に向かって多数派生する丘陵の内、東端部の舌状丘陵上に位置する。

早良平野奥部の発掘調査成果を概観し、歴史的環境について述べる。上述した扇状地内の脇山地区では圃場整備事業に伴う調査を主としてその様相が判明してきた。旧石器時代では脇山A遺跡第2・3次調査でそれぞれ細石核、三稜尖頭器各1点が出土しているが、遺構は未確認である。縄文時代では同遺跡をはじめ栗尾B遺跡、谷口遺跡等で早期から晩期に至る遺物が出土し、脇山A遺跡第5次調査では晩期の埋甕、土坑が検出されている。弥生時代では谷口遺跡での後期の土坑1例をのぞいては土器が少量出土するにとどまる。古墳時代においても脇山A遺跡第5次調査の6世紀代の竪穴住居、土坑が確認されたに過ぎず、長期にわたる生活の痕跡は看取されない。奈良時代では扇状地の西側丘陵に立地する峯遺跡で掘立柱建物が検出されている。該地では中世の所産と考えられる焼土坑の分布が広範囲に認められる。脇山A遺跡第4・5次調査では12世紀後半から13世紀代の掘立柱建物、土壙墓等が、また同第7次調査等は14世紀から16世紀の集落も検出されるが、1時期の占有域は比較的小規模であったと考えられる。また、該地は中世前半期には脊振山上宮東門寺の筑前国側山領としての支配下にあり、残存する文献史料との対比においても重要な地域である。当時の生活基盤であったと考えられる田畑の開発に関しては、貞観年間に紀伊国熊野より来た比丘尼が潅漑施設を築造し、新田開発に寄与したという伝承に基づくものではあるが、樋堰・樋溝・釣溝の水路が一部現存しており、地域開発史を考察する上で興味深い。なお、実際の築造年代については文献史学の立場から長禄4年(1460)を下限とする時期に比定されている。また、この一帯は筑紫郡や肥前国に抜ける交通の要衝でもあった。戦国時代には大友氏の被官であった小田部氏の居城である安楽平城が該地北側に位置する荒平山頂に占地していたが、天正年間に肥前国龍造寺氏の侵入により落城している。

参考文献

『脇山Ⅰ』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第236集) 福岡市教育委員会 1990

『脇山II』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集) 福岡市教育委員会 1991

『脇山III』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第311集) 福岡市教育委員会 1992

『脇山IV』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第312集) 福岡市教育委員会 1992

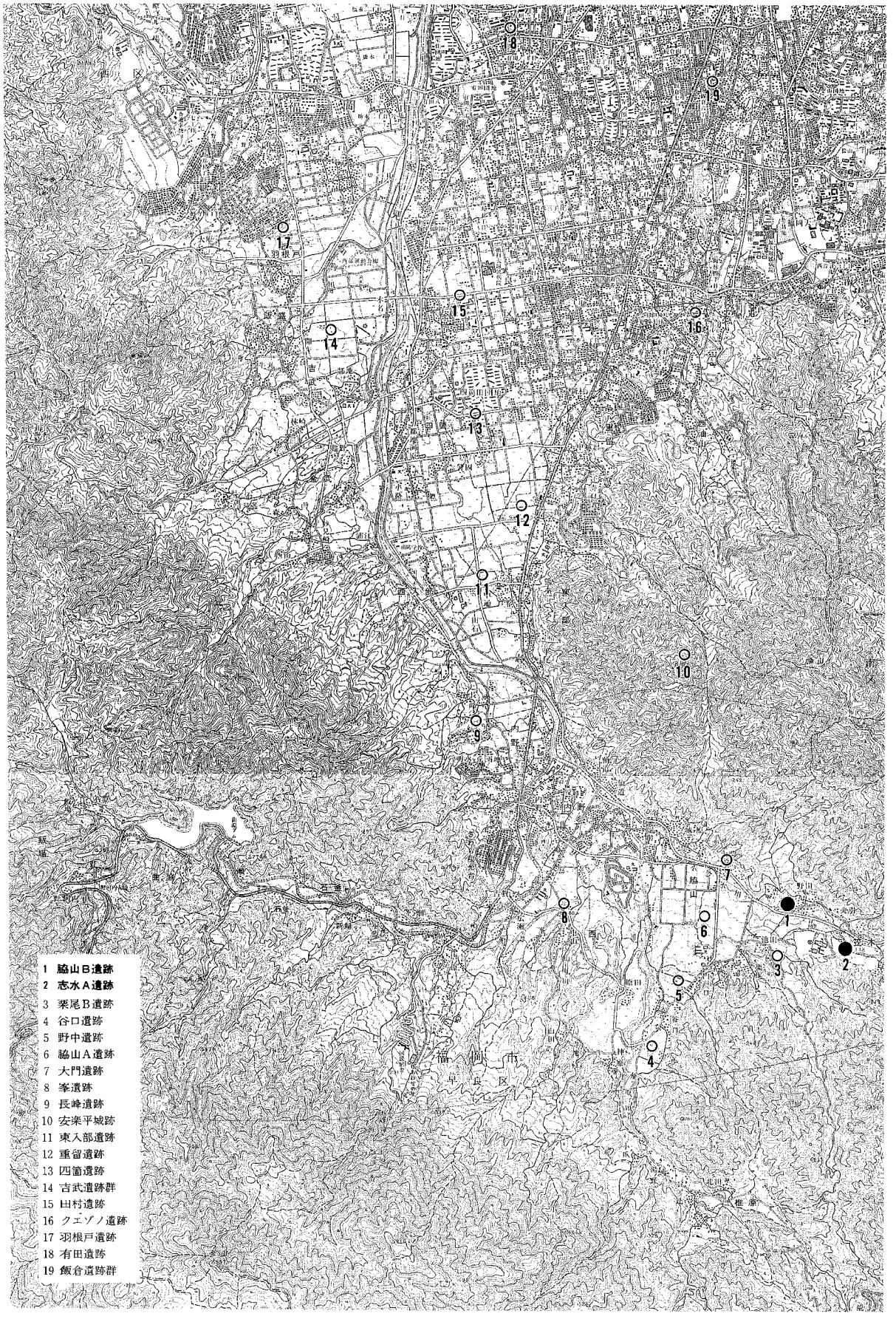
『脇山Ⅴ』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第344集) 福岡市教育委員会 1993

『脇山VI』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第386集) 福岡市教育委員会 1994

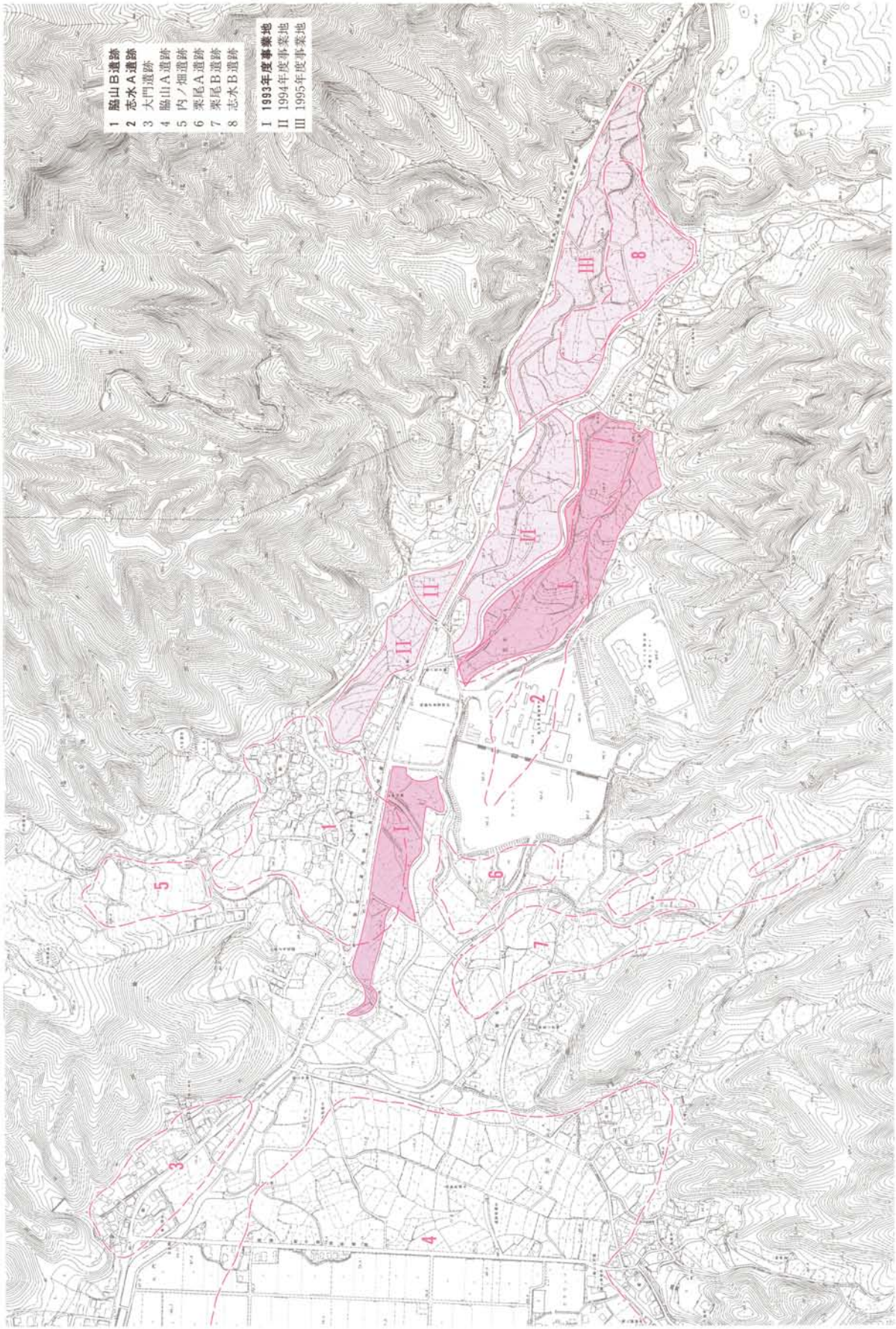
『峯遺跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第197集) 福岡市教育委員会 1989

吉良国光「脊振山の所領支配と村落-筑前国早良郡脇山を中心として-」『九州史学』特集号 1987

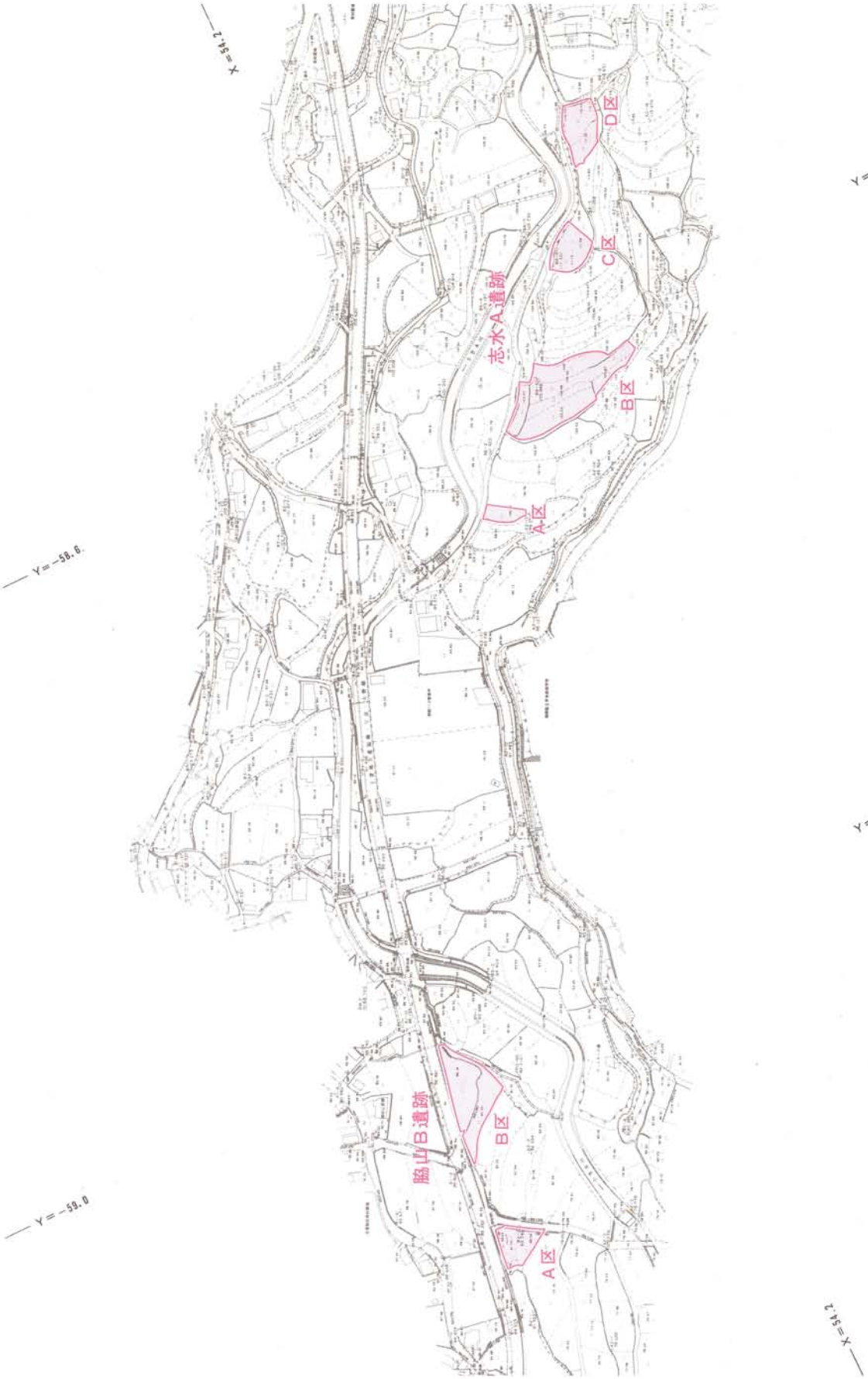
加藤純一・鷹取周成共編(川添昭二他校訂)『筑前国続風土記付録』(文献出版) 1977



第1図　周辺遺跡分布図(1/50,000)



第2図　小笠木地区圃場整備年次事業地及び周辺遺跡群(1/10,000)



第3図　脇山B遺跡第1次及び志水A遺跡第1次調査区位置図(1/4,000)

III. 脇山B遺跡第１次調査の記録

１．調査概要

脇山B遺跡は油山(標高597m)の南麓斜面上に位置し、南側は室見川の支流である小笠木川によって区切られる。今回報告する第１次調査は小笠木川に近い遺跡南端部の２調査区で実施し、西側調査区をA区、東側調査区をB区と呼称した。

調査は1993年７月13日より８月７日に実施し、調査面積は1,895.6㎡である。調査区の現況は斜面を段状に造成した水田で遺構面の削平が広範囲に認められ、遺構の遺存状況は良好とはいえない。検出した遺構は少数の土坑・焼土坑・ピットで、出土遺物も少量である。なお、調査時の遺構番号は３桁の通し番号とし、A区は001から、B区は051から付けた。番号には欠番があるものの、重複はない。以下の報告においては例言に記した遺構略号と調査時の遺構番号とを組合せ記述する。

２．A区の調査

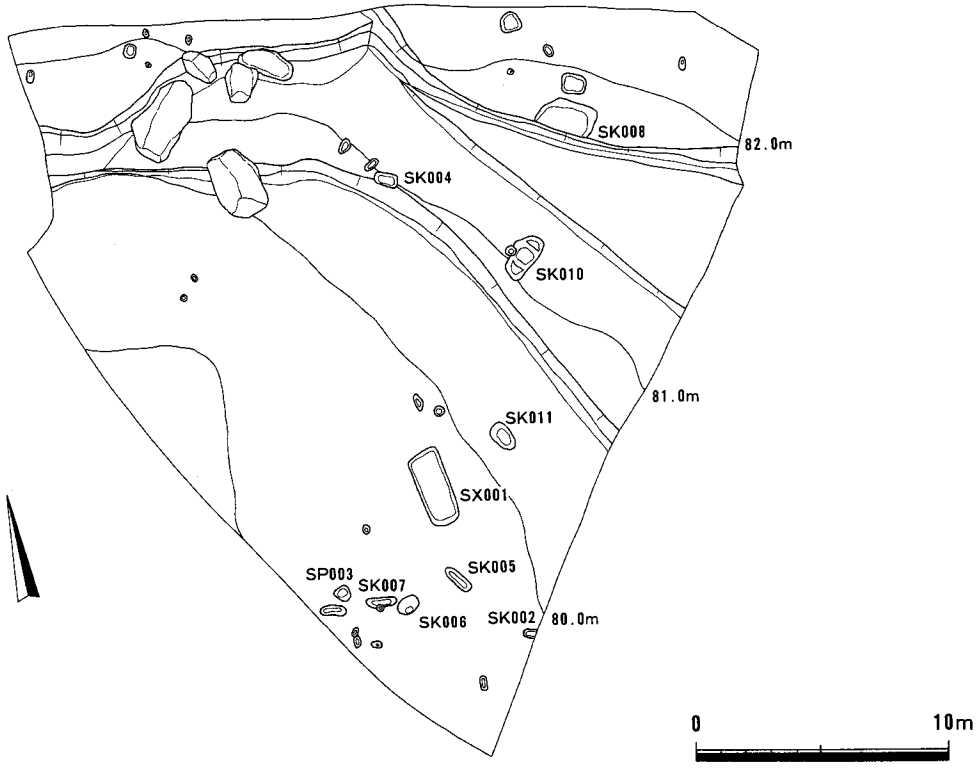
1) 概要

A区は遺跡の南西端に位置する。田面の削りに伴い560.3㎡を調査した。南西方向に傾斜する急斜面上を段状に造成し小区画の水田を設けているために、遺構面においても数段にわたる段落ちが認められた。遺構は耕作土を除去した赤味がかった黄褐色粘質土の上面で検出されるが、大きく削平を受けた段落ち部ではその下層のバイラン土が露出する。遺構面の標高は北東端で82.8m、南西端で79.5mを測る。検出した遺構は土坑、焼土坑、ピットである。

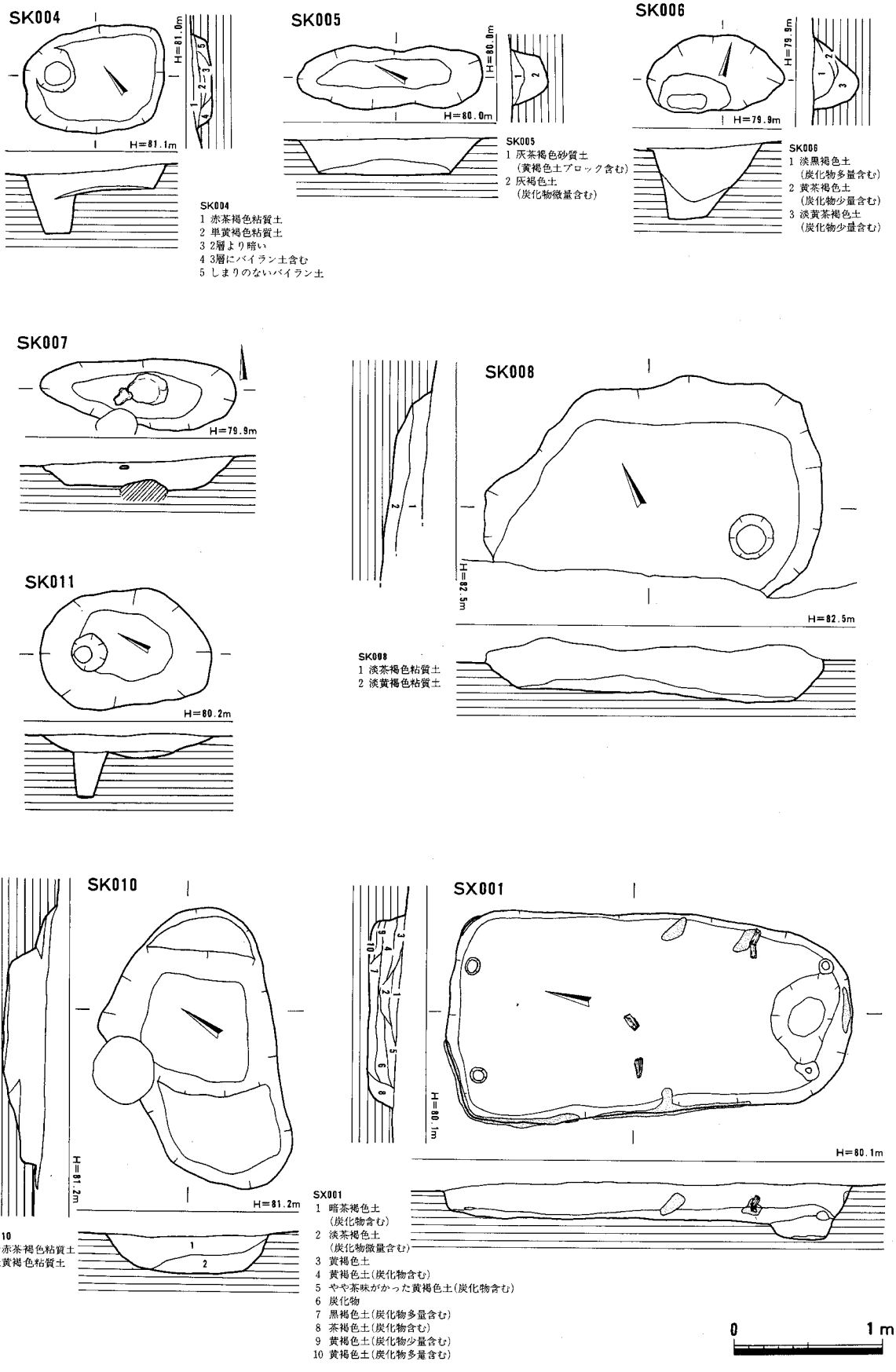
2) 遺構と遺物

(1)土坑

SK002　調査区の南東端に位置する。幅30cm、深さ６cmの溝状の土坑で、東側は調査区外に延びる。



第４図　脇山B遺跡A区遺構配置図(1/300)



第5図　A区遺構実測図(1/40)

覆土は茶褐色土である。

出土遺物(第8図8)　黒曜石の剥片である。平坦な打面を残し、頭部調整は認められない。右側辺に細部調整を施す。他に土器の細片が1点出土した。

SK004(第5図)　調査区北側に位置する。やや不整な隅丸方形を呈し、長さ0.9m、幅0.7m、深さ15cmを測る。北側の隅に底面より深さ25cmのピット状の掘り込みを有する。出土遺物はない。

SK005(第5図)　調査区南東に位置する不整な隅丸長方形の土坑である。長さ1.2m、幅0.4m、深さ25cmを測る。下層部に炭化物が微量認められた。出土遺物はない。

SK006(第5図)　SK005の西1.5mに位置する。不整な楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.5m、深さ45cmを測る。覆土の全体に炭化物を含む。なお、出土遺物はない。

SK007(第5図)　SK006に西接する狭長な溝状の土坑である。長さ1.3m、幅0.45m、深さ20cmを測る。覆土は淡黒褐色土で、炭化物を含む。出土遺物はない。

SK008(第5図)　調査区北東部に位置する。南側は水田造成時における削平により消失する。現存で長さ2.3m、幅1.4m、深さ30cmを測る。底面の南東に深さ20cmのピット状の掘り込みを有する。出土遺物はない。

SK010(第5図)　SK008の南4mに位置する。不整な長楕円形を呈し、東西に平坦面を有する。長径1.9m、短径1.2m、深さ25cmを測る。出土遺物はない。

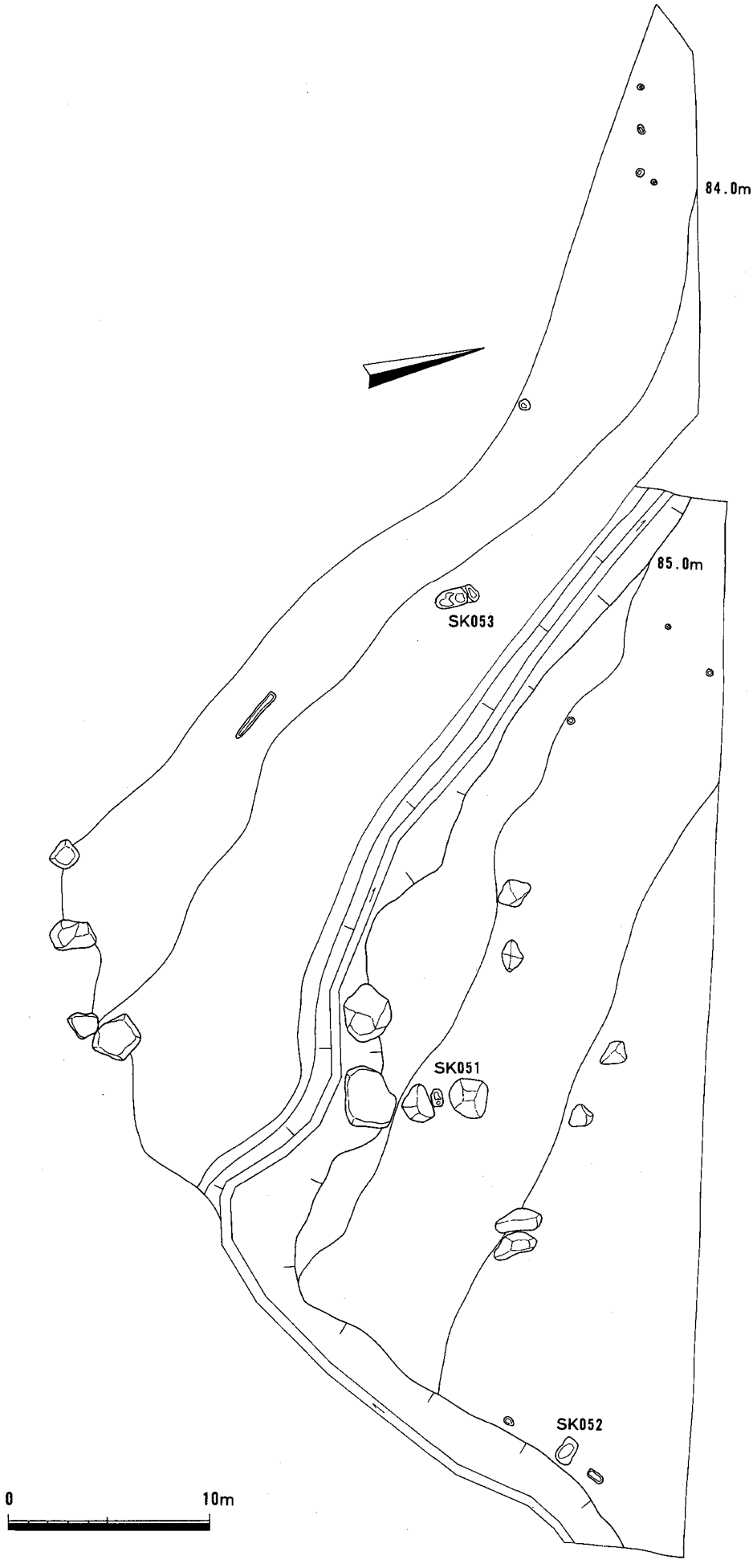
SK011(第5図)　SK010の南5.5mに位置し、不整な楕円形を呈する。長径1.1m、短径0.75m、深さ15cmを測る。底面の北端には深さ30cmのピット状の掘り込みを有する。覆土は茶褐色粘質土で、遺物の出土はない。

(2)焼土坑

SX001(第5図)　調査区南東部に位置する。隅丸長方形を呈し、長さ2.7m、幅1.35m、深さ20cmを測る。壁面の一部が焼ける。下層部を主に炭化物の堆積が認められた。4隅には径10cm、深さ10～30cmの小ピットが掘り込まれる。出土遺物はない。

(3)その他の遺構と遺物(第8図1・2・9・10)

ピット出土及び遺構検出時に採集した遺物を報告する。9はSK007の東側に位置するSP003から出土した黒曜石の石核で、裏面に両側辺からの大きな剥離面をもつ。1・2・10は遺構検出時に採集した遺物である。1は陶器の碗である。釉色は黄白色で、畳付きは露胎となる。体部外面には草花文が描かれる。内面見込みには目跡が残る。2は肥前系擂鉢である。直線的に延びる体部の上位で屈曲して、短い直立気味の口縁部となる。上端部は内面に突出する平坦面を有する。内面の擦り目は6条単位である。口縁部の内外面には鉄釉が施される。10は玻璃質安山岩製の削器である。右側辺に裏面から刃部を作出する。打面を欠く。



第6図　B区遺構配置図(1/300)

3．B区の調査

1）概要

B区は遺跡の南端部に位置する。用水路設置及び田面の削りに伴い1335.3㎡を調査した。現況は南西方向に傾斜する緩斜面を造成した水田である。調査区の南側では2m余りの比高差をもって段落ちし、小笠木川の旧流路に至る。遺構は耕作土を除去した巨礫を含む黄褐色粘質土の上面で検出され、水田造成時に削平を最も受けた調査区北側及び中央部段落ち部ではバイラン土が露出する。遺構面の標高は北側で85.8m、南側で83.7mを測る。検出した遺構は土坑、ピットである。

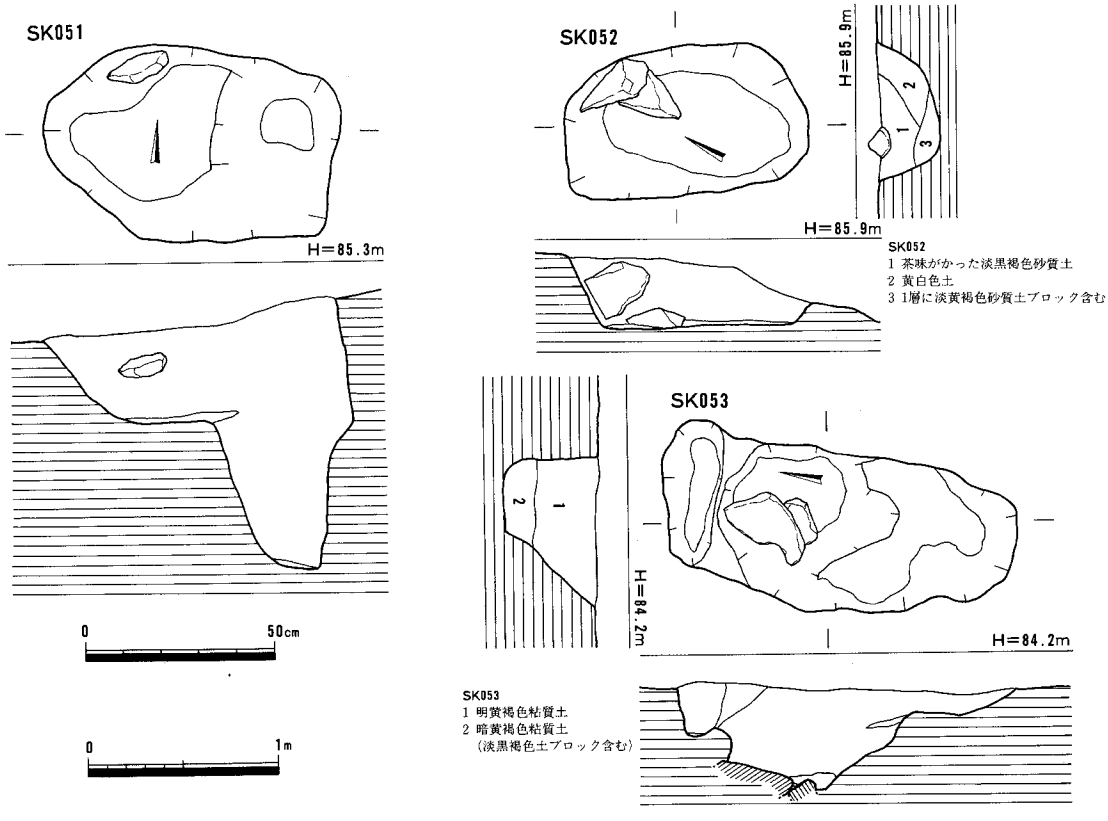
2）遺構と遺物

(1)土坑

SK051（第７図） 調査区中央東寄りに位置する。長さ0.8m、幅0.5mを測る不整方形の小規模な土坑である。西側には平坦面を有し、東側にはその平坦面より深さ40cmの掘り込みが認められた。図中の礫は地山に含まれるものである。覆土は淡灰茶褐色土に黄褐色土のブロックを含む。なお、遺物の出土はない。

SK052（第７図） 調査区の北東端に位置する。不整な隅丸方形を呈し、長さ1.3m、幅0.8m、深さ35cmを測る。SK051同様に図中の礫は地山中のものである。出土遺物はない。

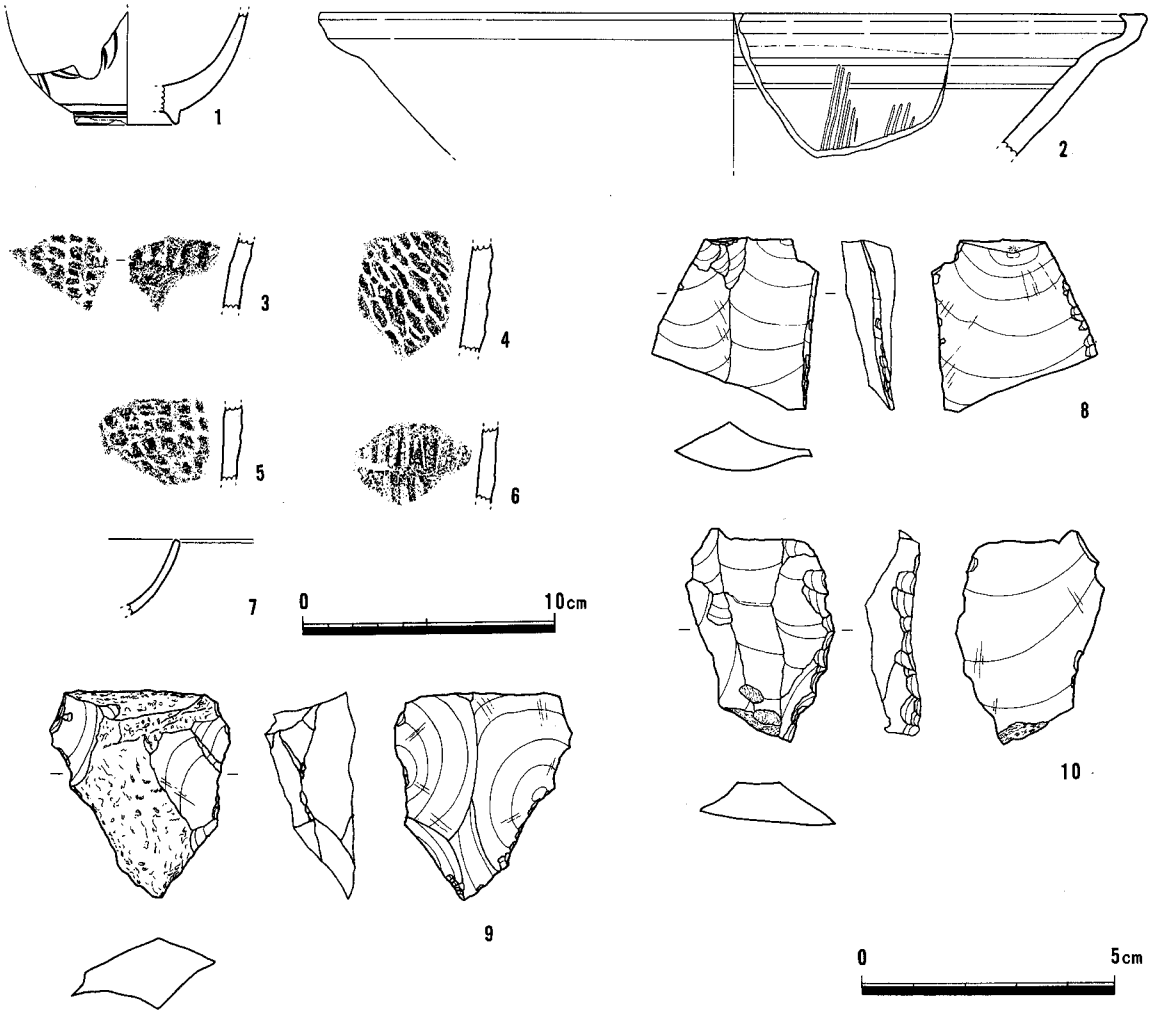
SK053（第７図） 調査区西端に位置する。やや歪な隅丸長方形を呈し、長さ1.9m、幅0.85m、深さは中央部で50cmを測る。中央部の横断面は逆梯形を呈す。底面は凹凸が著しく、北側には長楕円形の掘り込み、南側には傾斜面を有する。出土遺物はない。



第７図　B区遺構実測図（SK051は1/20、他は1/40）

(2)その他の遺物(第8図3～7)

上述した土坑を含め、ピットからも遺物の出土はなかったが、遺構検出時においては少量の遺物を採集したので、ここで報告する。3～6は縄文土器の細片である。3～5は押型文土器。3は口縁部付近の破片で端部が外反する。外面には小振りな楕円文を施文し、内面には幅0.4cmの原体条痕を施す。色調は内外面ともに黄褐色をなす。4は外面に長楕円文を深く斜走施文し、内面はナデを施す。色調は外面が淡黄橙色、内面が淡黒灰色である。5は外面に楕円文を施す。内外面は磨滅する。色調は外面が赤橙色、内面が明黄橙色である。6は外面に2単位の縦方向の沈線が施される。胎土には砂粒を多量に含む。外面はにぶい褐色、内面は淡褐色を呈する。7は白磁碗の口縁部である。内外面ににぶい白色の釉が施される。4は調査区北側、その他は南側の遺構検出時の遺物である。



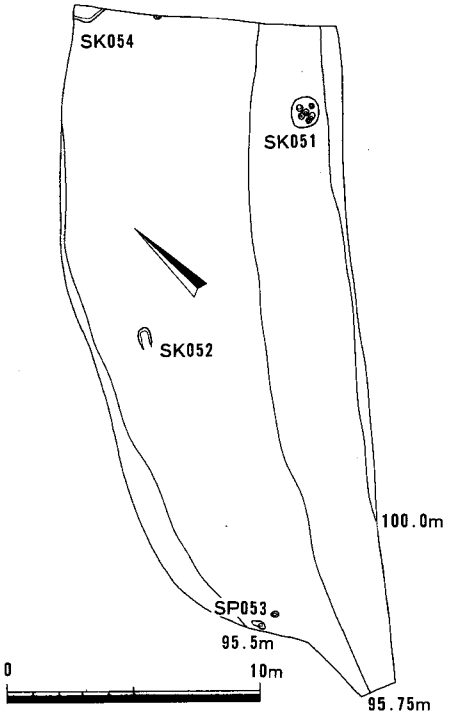
第8図　A区及びB区出土遺物実測図(8～10は2/3、他は1/3)

IV. 志水A遺跡第１次調査の記録

１．調査概要

志水A遺跡は脊振山系より北西方向に派生する舌状丘陵上に位置し、丘陵の北東沿いには小笠木川が西流する。今回の第１次調査は丘陵端部付近から丘陵上の約300mの範囲内において４調査区で実施し、端部よりそれぞれA～D区と呼称した。

調査は前述した脇山B遺跡第１次調査終了後の1993年８月９日より10月２日に実施し、調査面積は4,254.1㎡である。調査区の現況は比較的緩やかな丘陵斜面を段状に造成した水田である。検出した遺構は掘立柱建物、土坑、焼土坑、ピット等である。出土遺物は少量で詳細な時期は不明な点が多い。なお、遺構番号は調査順に３桁の通し番号とし、A区は051、B区は001、C区は101、D区は151から付けた。番号には欠番があるものの、重複はない。以下の報告においては例言に記した遺構略号と調査時の遺構番号とを組合せ記述する。

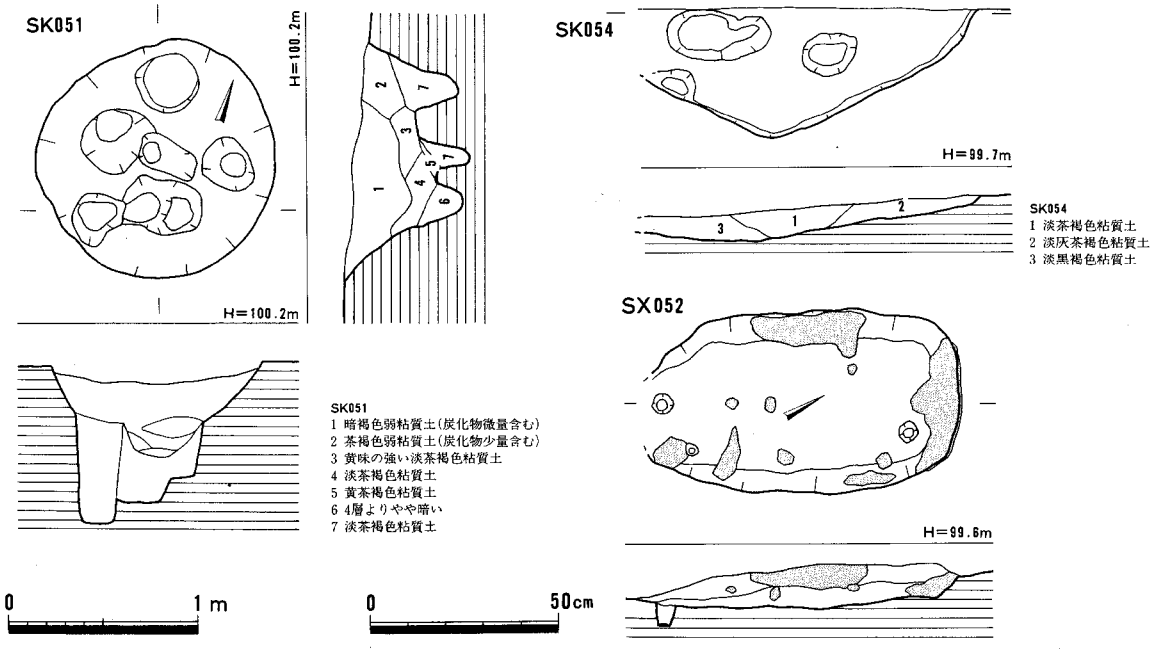


第９図　志水A遺跡A区遺構配置図(1/300)

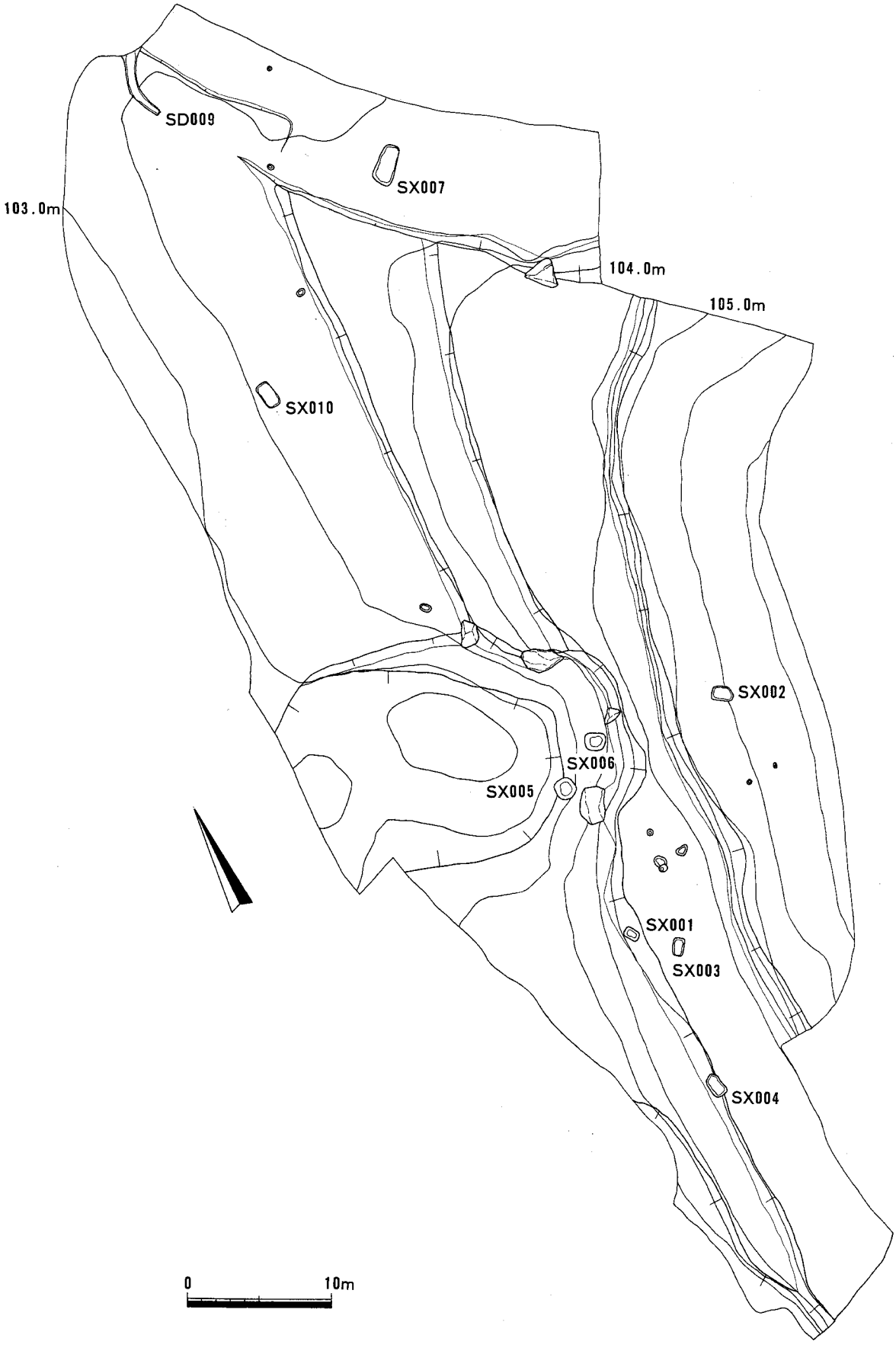
２.A区の調査

１)概要

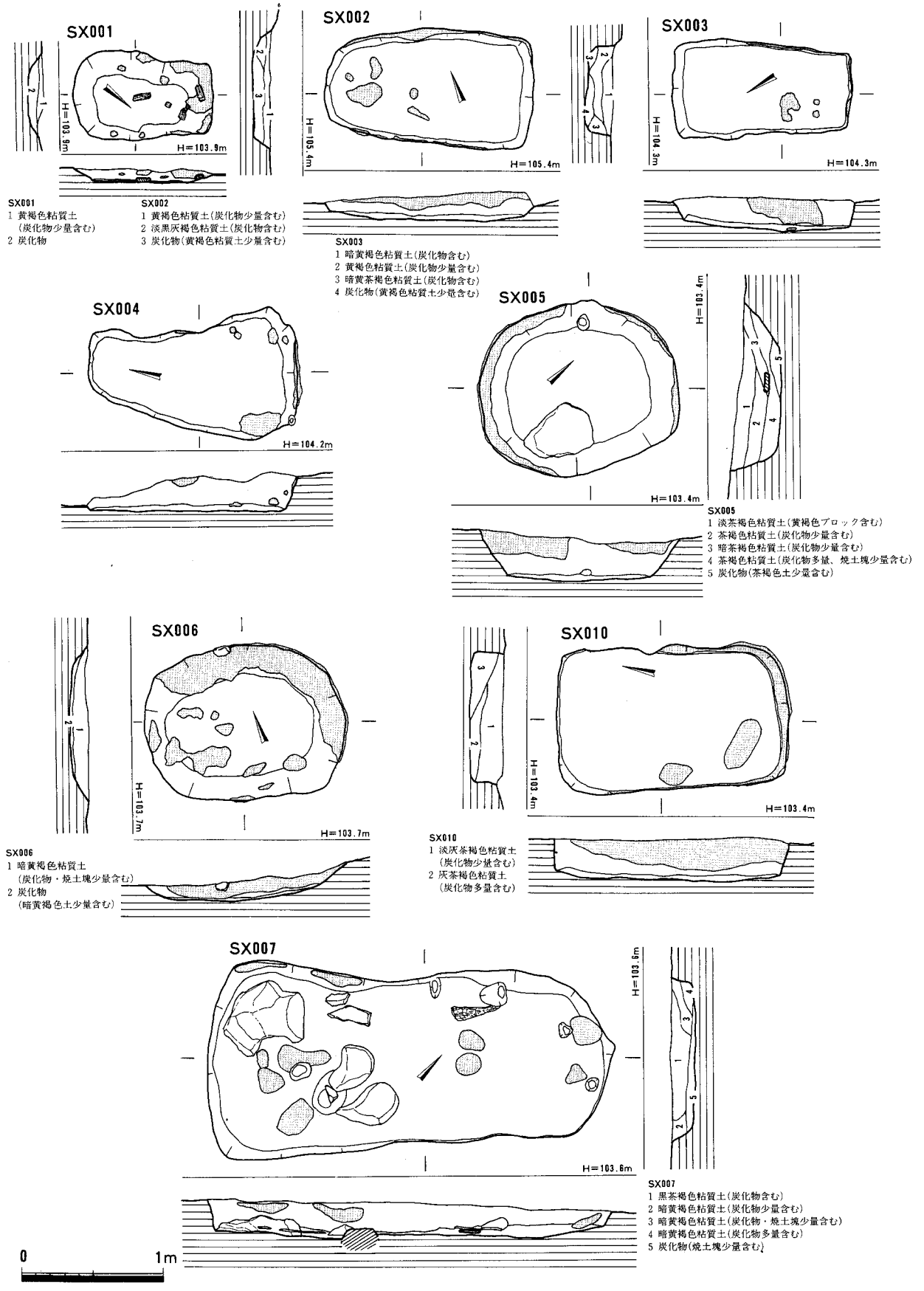
A区は今回の調査区の北西端に位置し、丘陵端部付近に立地する。道路建設及び田面の削りに伴い287.0㎡を調査した。遺構は耕作土を除去した明黄褐色粘質土上面で検出され、遺構面は北西方向に緩く傾斜する。標高は南東で99.9m、北西で99.4mを測る。検出遺構は土坑、焼土坑、ピットである。



第10図　A区遺構実測図(SX052は1/20、他は1/40)



第11図　B区遺構配置図(1/400)



第12図　B区遺構実測図(1/40)

2) 遺構と遺物

(1)土坑

SK051(第10図)　調査区東端に位置する。上面では径1.25mの円形プランを検出し、掘り下げを 行なった結果、底面で円形もしくは不整方形の6個のピット状の掘り込みを確認した。遺物は南側の上層で出土した土師質土器の細片1点のみである。

SK054(第10図)　調査区北端に位置し、北側は調査区外に延びる。隅丸方形を呈するものと考えられるが、壁面の立ち上がりが緩やかで、底面は遺構面に沿う様に傾斜が認められることから丘陵斜面上の浅い窪地の可能性もある。底面では浅いピット状の掘り込みが認められた。出土遺物はない。

(2)焼土坑

SX052(第10図)　調査区中央西寄りに位置する小規模な焼土坑である。隅丸方形を呈し、長さ0.85m、幅0.5m、深さ20cmを測る。覆土は暗黄褐色粘質土で炭化物・焼土塊を含む。壁面は部分的に焼ける。長軸の底面両端部には小ピットが掘り込まれる。出土遺物はない。

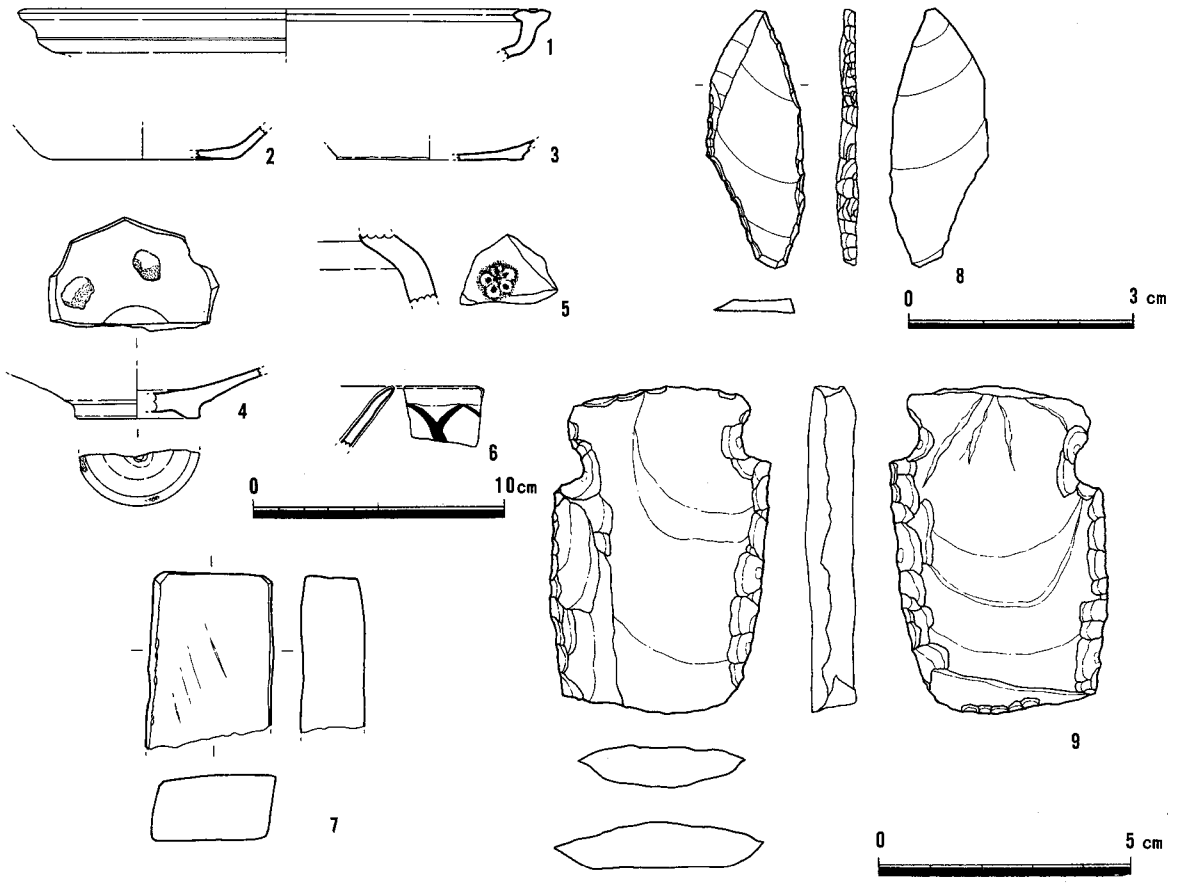
(3)その他の遺構と遺物(第13図1・2)

2は調査区南端に位置するSP053から出土した土師器坏である。復元底径7.6cmを測る。内外面ともに磨滅し、調整は不明である。1は遺構検出時に採集した陶器で、復元口径21.0cmを測る。内湾して立ち上がる口縁部の上端は「T」字状を呈し、中央は浅い凹部をもつ。内外面には鉄釉が施される。肥前系の擂鉢と思われる。

3．B区の調査

1) 概要

B区はA区の南東約50mの丘陵上に位置する。調査区北側部分は尾根筋に該当し、南西斜面の中央付



第13図　A区及びB区出土遺物実測図(7は1/2、8は1/1、9は2/3、他は1/3)

近には浅い谷が開析する。道路建設及び田面の削りに伴い2,731.2㎡を調査した。遺構は耕作土を除去した礫を含む赤味の強い明黄褐色粘質土上面で検出される。標高は尾根部分の高所で105.5m、低所で103.0mを測る。検出遺構は焼土坑、溝、ピットである。

2) 遺構と遺物

(1)焼土坑

SX001(第12図) 調査区南側に位置する。やや不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.0m、幅0.65m、深さ10cmを測る。北側の壁面が主として焼ける。2層はケシ状の炭化物を主体とする層で、土坑内全域に認められた。壁面の立ち上がりは緩い。出土遺物はない。

SX002(第12図) 調査区東側に位置する。隅丸長方形を呈し、長さ1.5m、幅0.85m、深さ20cmを測る。長軸方向の壁面及び西側底面の一部が焼ける。出土遺物はない。

SX003(第12図) SX001の南東約3mに位置する。長方形を呈し、長さ1.3m、幅0.75m、深さ25cmを測る。南側壁面及び底面の一部が焼ける。出土遺物はない。

SX004(第12図) 調査区南側で検出した。現水田造成時の段落ち部に位置するため西側は削平を受け、遺存状況は悪い。現況では平面プランは羽子板型であるが、削平以前は隅丸長方形であったと推定される。長さ1.5m、幅0.9m、深さ25cmを測る。南側壁面の上位を主に焼ける。出土遺物はない。

SX005(第12図) 南西斜面の谷頭付近に位置する。不整な円形を呈し、径1.2～1.4m、深さ30cmを測る。壁面は底面より15cm以上がよく焼ける。北西壁面際の中央には深さ13cmの小ピットが掘り込まれる。なお、出土遺物はない。

SX006(第12図) SX005の北東約3mに位置する。不整楕円形を呈し、長径1.45m、短径1.1m、深さ15cmを測る。北側壁面及び南側の底面の一部が焼ける。出土遺物はない。

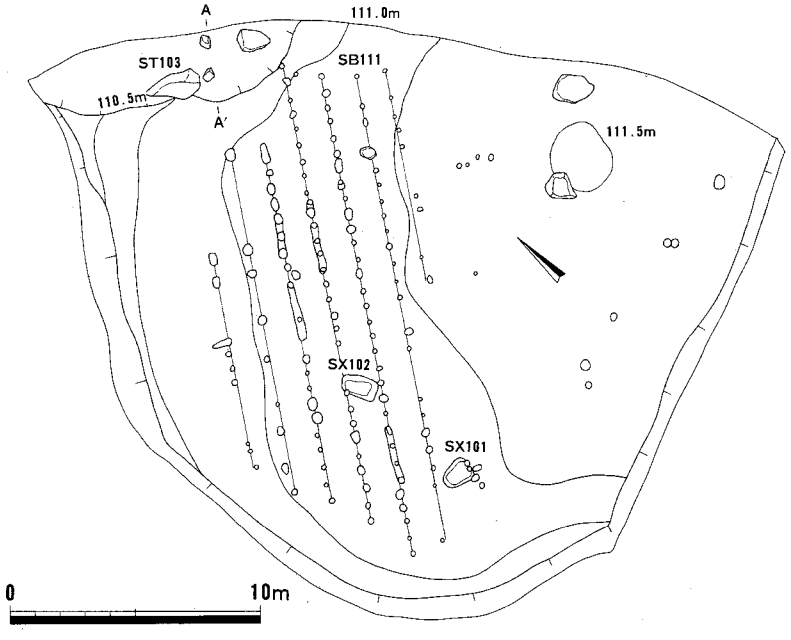
SX007(第12図) 調査区北端部に位置する。隅丸長方形を呈し、長さ2.9m、幅1.4m、深さ20cmを測る。壁面の焼けは少量で、覆土の下位には焼土塊が認められた。底面には深さ10～30cmの小ピットが掘り込まれる。出土遺物はない。

SX010(第12図) 調査区北東に位置する。隅丸長方形を呈し、長さ1.7m、幅1.0m、深さ30cmを測る。壁面は北側を除いてよく焼ける。壁面の立ち上がりは急である。出土遺物はない。

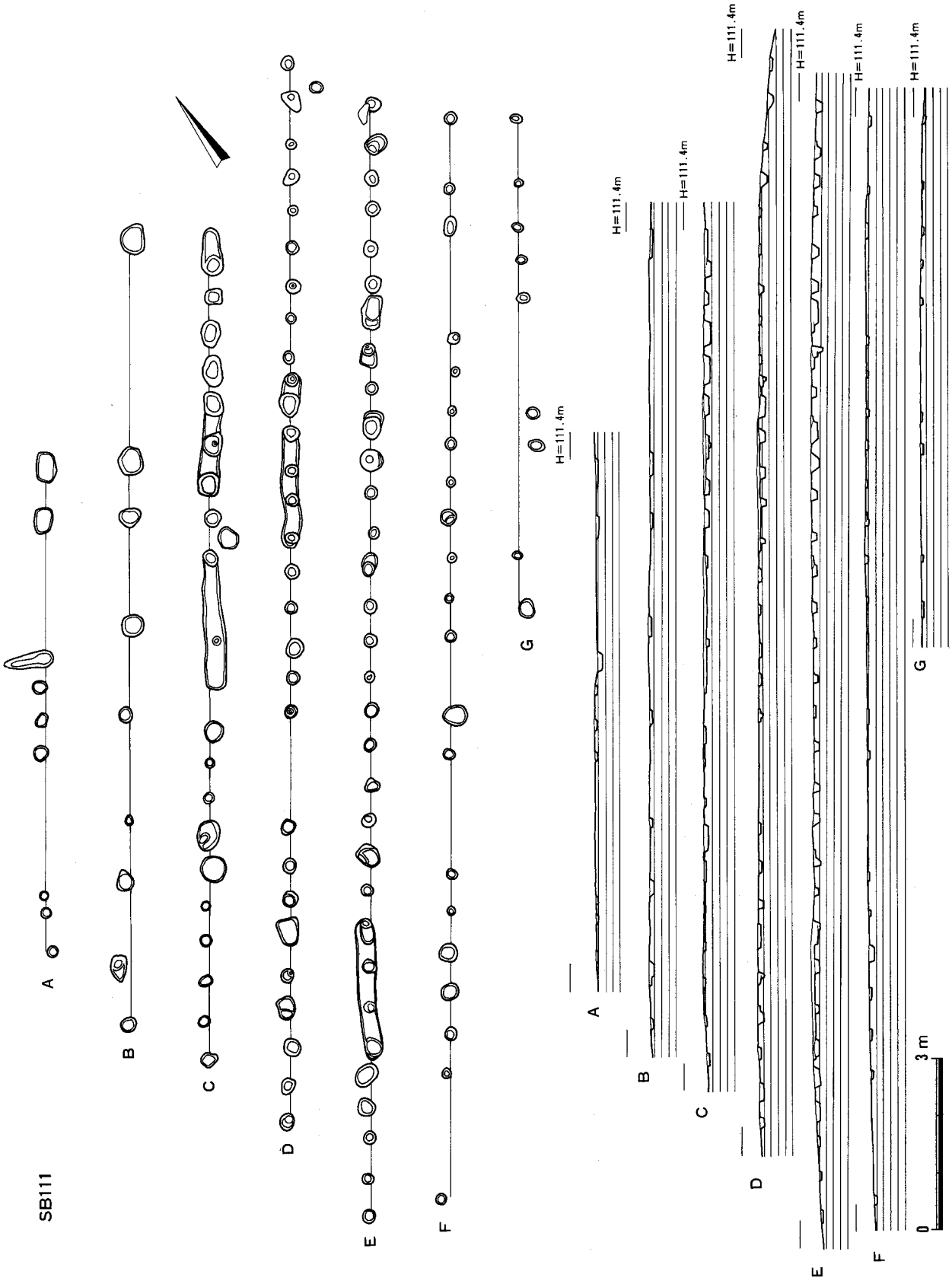
(2)その他の遺構と遺物

(第13図3～9)

3は調査区北東端に位置するSD009から出土した土師器坏で、復元底径7.4cmを測る。内外面共に磨滅する。なお、この溝の覆土は床土と同様の灰褐色土で、近現代の遺構である。4～9は遺構検出時に採集した遺物である。4は李朝の青磁皿で、復元底径4.8cmを測る。



第14図 C区遺構配置図(1/300)



第15図　C区遺構実測図(1)(1/100)

全面にくすんだ黄白色の釉が施される。内面見込み及び畳付きには目跡が残る。5は瓦質の湯釜肩部片である。スタンプによる花文を施す。6は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。幅広の蓮弁文を有する。内外面には淡緑色の釉が施される。7は砂岩製の砥石である。4面を砥面として使用する。8は黒曜石製のナイフ形石器である。縦長の剥片を素材とし、側辺部の鋭利な部分を刃部としている。刃部を除いてブランティング加工を施す。その方向はすべて裏面からである。9は安山岩製の縦型石匙である。幅広の長方形を呈し、先端は直線的である。

4．C区の調査

1）概要

C区はB区の南東約70mに位置し、現況は周囲の水田より1m余り高い畑地である。調査区南東部は略平坦で、北西側は傾斜を有するが、緩やかである。北側は急傾斜をもって小笠木川へと至る。田面の削りに伴い472.0m²を調査した。遺構は耕作土を除去した礫を含む赤味の強い黄褐色粘質土上面で検出される。標高は南東部で111.5mを測る。検出遺構は掘立柱建物、焼土坑、谷部である。

2）遺構と遺物

(1)掘立柱建物

SB111（第15図）　調査区北西側の緩斜面上で検出した。並行する7列（A～G列）の柱列を確認し、長さは順に8.5、13.7、13.9、18.4、19.4、18.9、8.6mである。柱列の方位はN-36°-Eである。A列からF列は1.4～1.5mの略等間隔に配列され、F-G列間は1.2mとやや狭い。柱穴は径15～30cmの小規模な円形を主体とし、不規則に径40～50cmの円形もしくは不整方形のものが認められる。C・D・E列では一部布掘り状の掘り方が検出された。柱間は50～70cmが主体となるが、削平よるものであろうか、1m以上の柱間が認められる。全体に削平を受けているため深さは10cm前後と遺存状況は悪く、柱痕の確認はできなかった。覆土は淡灰褐色土である。出土遺物はC・E列各1個の柱穴より極細片の青磁・白磁計2点のみである。

(2)焼土坑

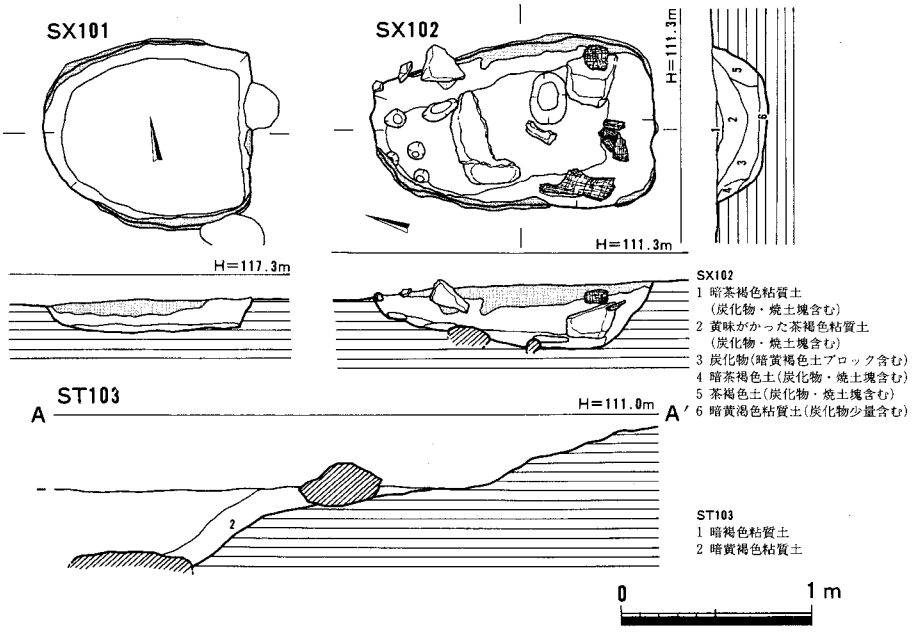
SX101（第16図）　調査区南側に位置し、数個のピットに切られる。不整方形を呈し、長さ1.1m、幅1m、深さ15cmを測る。壁面が焼ける。覆土は炭化物を含む黄茶褐色粘質土で、出土遺物はない。

SX102（第16図）　調査区中央西側に位置し、SB111D列の柱穴に切られる。不整隅丸長方形を呈し、長さ1.5m、幅0.9m、深さ35cmを測る。底面は緩く南側に傾斜し、小ピットが掘り込まれる。壁面の上位がよく焼ける。覆土中に木炭が遺存するが、他に出土遺物はない。

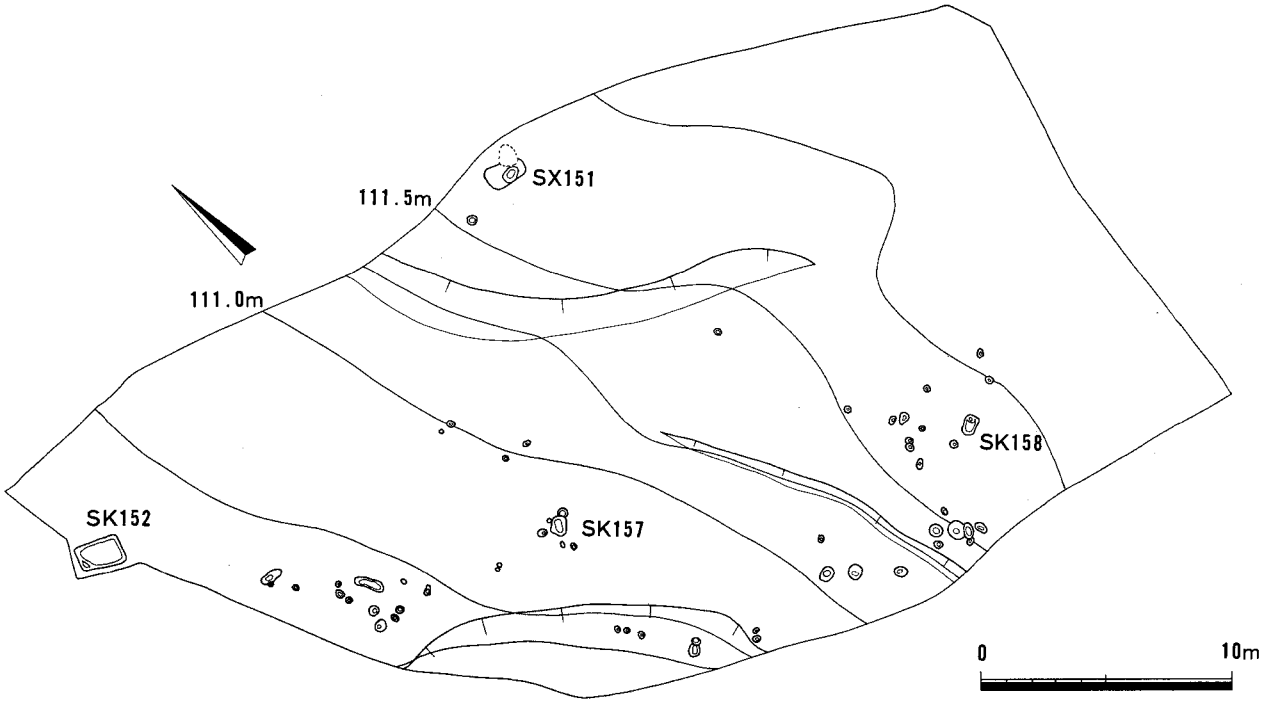
(3)その他の遺構と遺物

（第16図、第19図10～17）

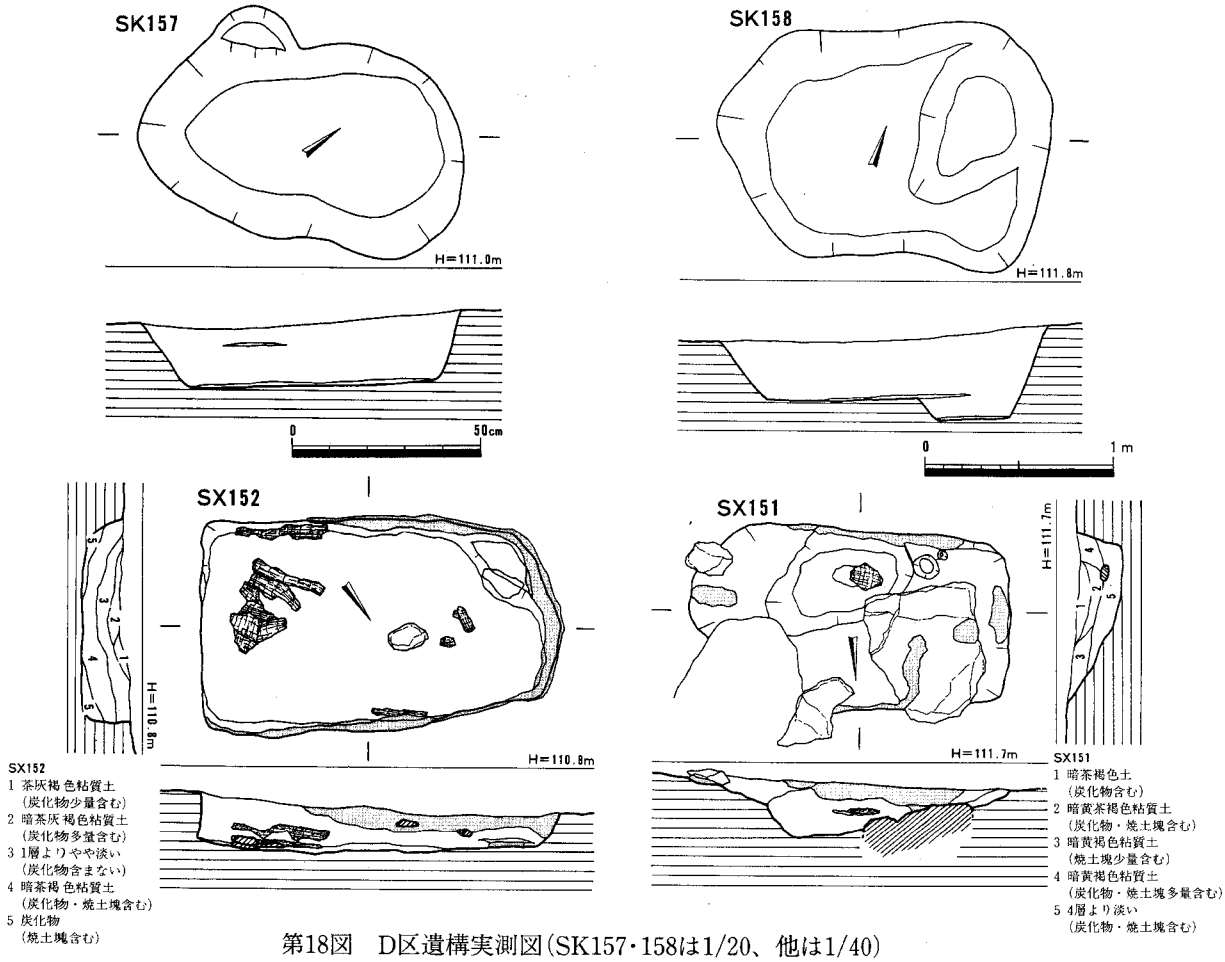
調査区北側には小笠木川へと傾斜する谷（ST103）斜面の肩を検出し、一部掘り下



第16図　C区遺構実測図(2)(1/40)



第17図　D区遺構配置図(1/300)



第18図　D区遺構実測図(SK157・158は1/20、他は1/40)

げを行なった。覆土中より出土した遺物について報告する。10は李朝陶器の皿である。内外面に淡黒灰色の胎土に透明釉が内外面に施される。内面見込み及び畳付きには目跡が残る。11・15は青磁である。11は内面に、15は内外面に淡オリーブ色の釉が施される。12～14は明代染付である。12は細い高台を有する碗で、平坦な内面見込みに花文が描かれる。また、高台内には字款が書かれる。13は碁笥底で、外底部は中央部を除いて露胎となる。内面見込みには「寿」字が書かれる。14は端反りの皿である。内外面に界線を有し、外面には草文が描かれる。16は瓦質の火舎である。口縁下の2条の突帯間にはスタンプ文を施す。17は土師質羽釜の鍔部分である。他に土師質、瓦質、磁器の細片が出土している。

5．D区の調査

1) 概要

D区はC区の北西約50mに位置する。今回調査区の最高所の西側緩斜面に立地する。北側はC区同様に傾斜を有し、小笠木川へと続く。田面の削りに伴い763.9㎡を調査した。遺構は北側では黄褐色粘質土上、南側ではバイランド土上で検出される。標高は東側で111.9m、西側で110.6mを測る。検出遺構は土坑、焼土坑、ピットである。なお、ピットは調査区南側に偏在しており、覆土は粗砂あるいは砂質土である。不整形な凹み状のものが大半である。ピットからの出土遺物は少量の細片のみである。

2) 遺構と遺物

(1)土坑

SK157(第18図)　調査区の中央西側に位置する。不整な楕円形を呈し、長径0.85m、短径0.5m、深さ15cmを測る。西側には平坦面が張り出す。覆土は黄灰色粗砂である。

出土遺物(第19図18・21)　18は玉縁口縁の白磁である。くすんだ灰白色の釉が施される。21は安山岩製の横型石匙である。両側からの剥離により摘み部を作り出す。他に土師器の細片、黒曜石剥片、鉄滓1点が出土した。

SK158(第18図)　調査区北東に位置する。不整方形を呈し、長さ0.9m、幅0.6m、深さ15cmを測る。東側には不整形な掘り込みを有する。土師器の細片が3点出土した。

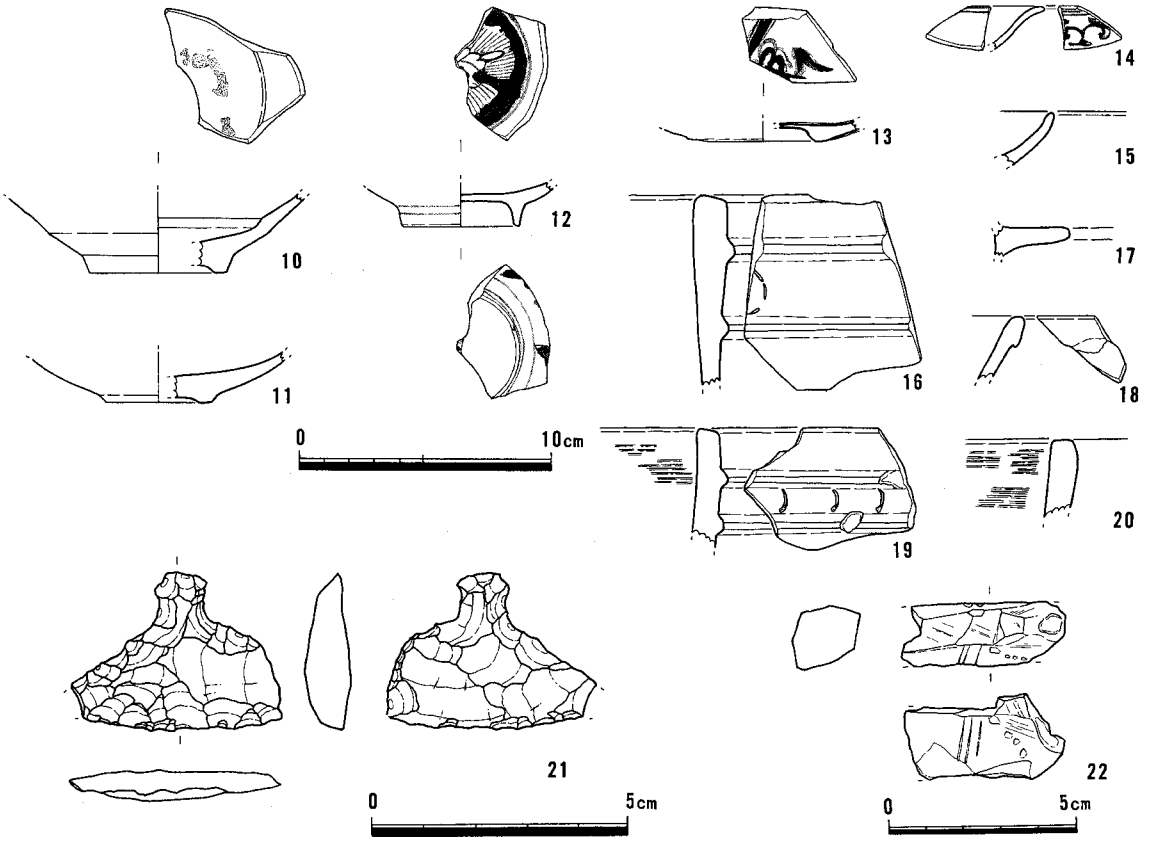
(2)焼土坑

SX151(第18図)　調査区北端に位置し、礫を含む地山中に掘り込まれる。東側は石抜き跡に攪乱される。隅丸長方形を呈し、長さ1.7m、幅1.0m、深さ30cmを測る。壁面及び底面が焼ける。木炭が少量遺存するが、他に出土遺物はない。

SX152(第18図)　調査区西端に位置する。隅丸長方形を呈し、長さ1.9m、幅1.1m、深さ25cmを測る。南西隅には平坦面を有する。壁面の上半部がよく焼ける。底面には良好に木炭が遺存する。他に縄文土器と思われる細片が1点出土した。

(3)その他の遺物(第19図19・20・22)

遺構検出時に採集した遺物を報告する。19は土師質の火舎である。口縁下に2条の突帯を貼り付け、その間にスタンプ文を施す。内面には刷毛目が残る。20は土師質の土器で、内湾気味の口縁部内面には刷毛目が残る。火舎もしくは鉢であろう。22は滑石製品で、石鍋の再加工品と思われる。両端部を欠失する。全面に粗いノミの削痕が残り、方形の小振りの摘みを有する。



第19図　C区及びD区出土遺物実測図（21は2/3、22は1/2、他は1/3）

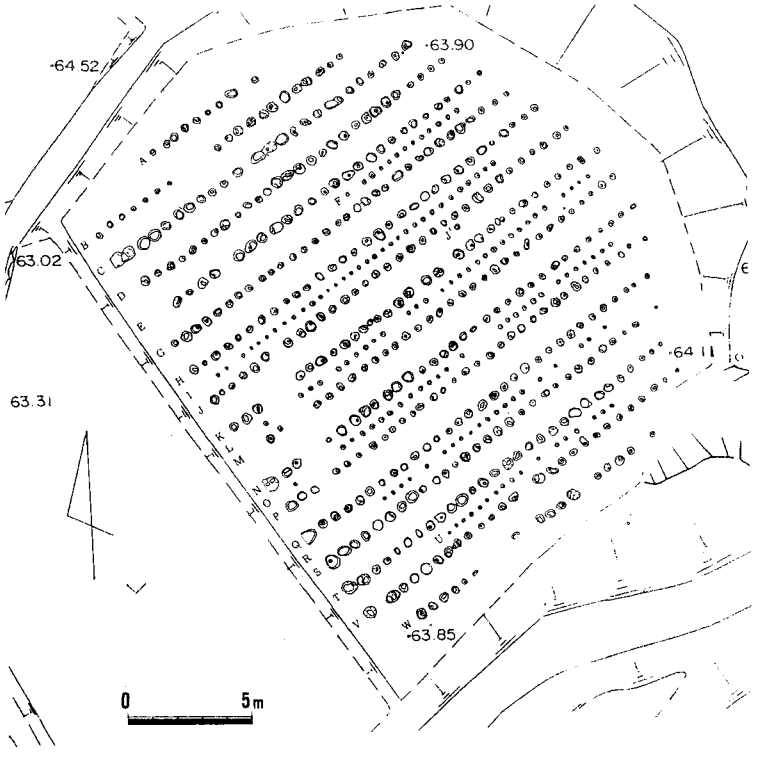
V．結語

今回の脇山B・志水A遺跡の調査では遺構に明確に伴う遺物が希少で、時期的に不明な点が多い。遺構面の遺物では志水A遺跡でナイフ形石器が１点出土した。西側扇状地に立地する脇山A遺跡の細石核、三稜尖頭器に続いて該地では３例目の旧石器時代遺物の出土となる。また、縄文時代では押型文土器が脇山B遺跡で出土した。磨滅を受けており、今回調査区の斜面高所に遺構の存在する可能性がある。また、該地の既往調査においては脇山A遺跡、栗尾B遺跡での包含層出土例があるが、遺構は未確認である。各調査区で確認された焼土坑(SX)は該地では広範囲に多数検出されており、12～14世紀の木炭生産用の土坑と考えられている。その密度は脇山A遺跡等に比すると薄く、集落との相関が察知される。

志水A遺跡C区で検出されたSB111は特異な柱穴配置を呈し、一般集落で検出される通有の堀立柱建物とは一見して大きく異なっている。まず時期的位置付けであるが、前述した様に柱穴出土遺物は稀少、細片で時期比定の材料として用いるには困難がある。しかし、同区の谷部(ST103)覆土に包含された遺物は、SB111としてまとめた柱列群に重複が認められず一時期の所産と考えられることや、同区にSB111を除いて焼土坑以外に遺構が未検出であることを考え合わせると、従来この建物に帰属していたものが廃棄されたものであると判断される。遺物は細片であるが明代染付には小野分類[1]碗E群(第19図12)、皿C群(同図13)、皿B群(同図14)が出土しており、16世紀後半に位置付けられる。この建物の類例として熊本県玉名郡三加和町所在の田中城跡平成４年度調査遺構[2](第20図)が挙げられる。田中城は戦国時代末期の和仁一族の居城であったが、天正15年(1587)に豊臣秀吉の命を受けた領主らによっ

て落城している。田中城では並行する23列(A～W列)の柱列(N-56°-E)が確認されている。このうち、F・I・L・O・R・U列は柱穴の規模が小さく(以下小柱列)、これら以外の規模のやや大きな柱列(以下大柱列)間に配される。出土遺物には土師質・瓦質の火舎、土師器坏、青磁碗等の他に鉛製鉄砲玉がある。また、幸いに残存する陣取図には調査区に比定される箇所に建物跡が描かれており、落城前の和仁軍の連棟式長屋(兵舎)跡との推測がなされている。また、建物の構造については大柱列(2)・小柱列(1)、大柱列(2)・小柱列(2)をそれぞれ一組の構成とみなす2通りの考案が提示されている。SB111と田中城例との諸属性には共通する点が多く、大柱列間の距離は両者共に1.2～1.5mで略一致をみる。柱間については残存状況が良好な箇所での比較で、50cm前後の間隔を有するものの、等間隔には配されないことも類似する。なお、田中城で検出された小柱列は両側の大柱列と比して浅く掘り込まれており、束柱と考えられる。SB111で検出された柱列は柱穴径から田中城例の大柱列に該当すると推察され、その遺存状況から小柱列は削平を受けたものと考えられる。この様に時期的、構造的にも両者は極めて類似しており、SB111を田中城例に準えると想起されるのはC区の北西約3kmに位置する安楽平(あらひら)城との関係である。標高394.9mの荒平山頂に築城された山城で、室町時代には大内氏の早良郡支配の拠点であった。しかし、大内氏滅亡後には筑前を支配下に入れた大友氏の被官である小田部氏が居城することとなる。『筑前国続風土記』によると小田部紹叱が天文22年(1552)に入城し、郡内を支配するが、天正7年(1579)に肥前龍造寺氏が5,000余人の軍勢を率いて侵入する。激戦の末紹叱父子は討死にし、安楽平城は落城している。この記事では小田部軍は一定期間の籠城後に城外での合戦の末、戦死しており、SB111を田中城同様に兵舎と理解すると龍造寺軍の施設として解釈する方がこの記事には合致する。龍造寺軍の拠点はC区西方約2kmの内野山中にあるが、紹叱戦死後、城中に残された女童を兵糧攻めにしようと城外の各所に龍造寺の諸軍が陣を設置している。SB111は時期的にも矛盾がないことからも、それらの施設の一つであった可能性をここでは提示したい。また、束柱の削平の可能性により大柱列のセットは明らかにし得ないが、田中城例を含めても大柱列の柱は不等間隔に配されるために、整合しないものが多く認められる。これはこれらの施設が長期的利用を考慮したものではなく、仮設的な施設であった所似の結果として理解しておきたい。SB111が検出されたC区は「4.-1概要」に述べた様に狭地ながらも隣地より高所に立地しており、周囲を削り出した可能性もある。該地からは荒平山や那珂郡へと通じる小笠木峠を望見することができる。

以上卑見を述べてみたが、類推によるところが多い。また、建物構造の考察や史料検索も十分に行なえていない。今後の検討課題として再考したい。



第20図　田中城跡平成4年度調査遺構実測図(1/300)(註2)文献より)

註　1)小野正敏　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982
2)黒田裕司編　『田中城跡IV』(三加和町文化財調査報告第7集)三加和町教育委員会 1993

図　　版

脇山Ｂ遺跡

(1)A区全景（上空から）

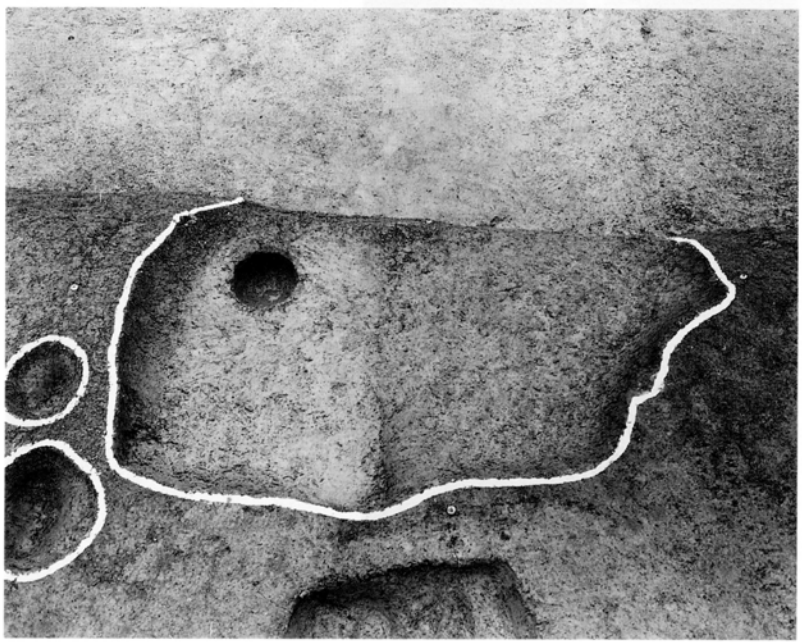
(2)B区全景（上空から）

図版 2

脇山Ｂ遺跡

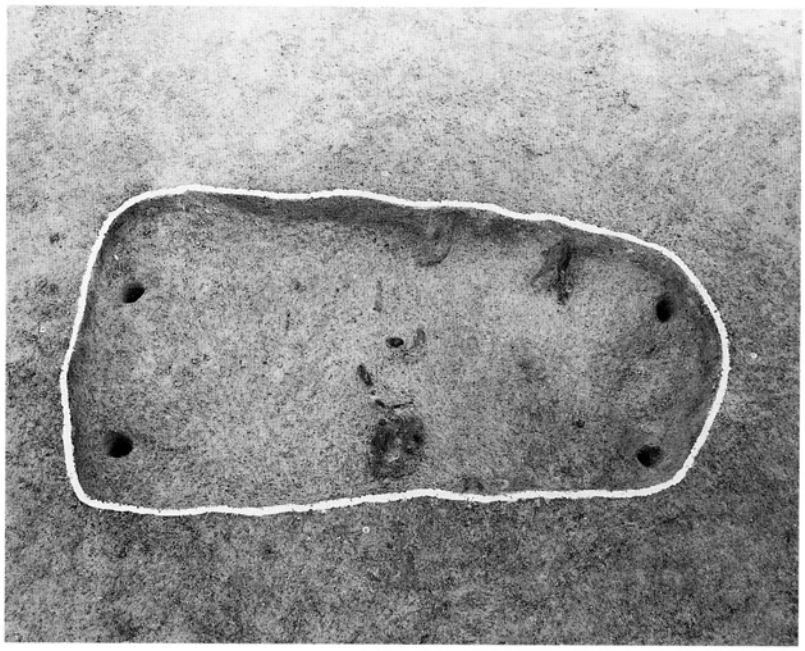
(1)A区SK 005(東から)

(2)A区SK 007(北から)



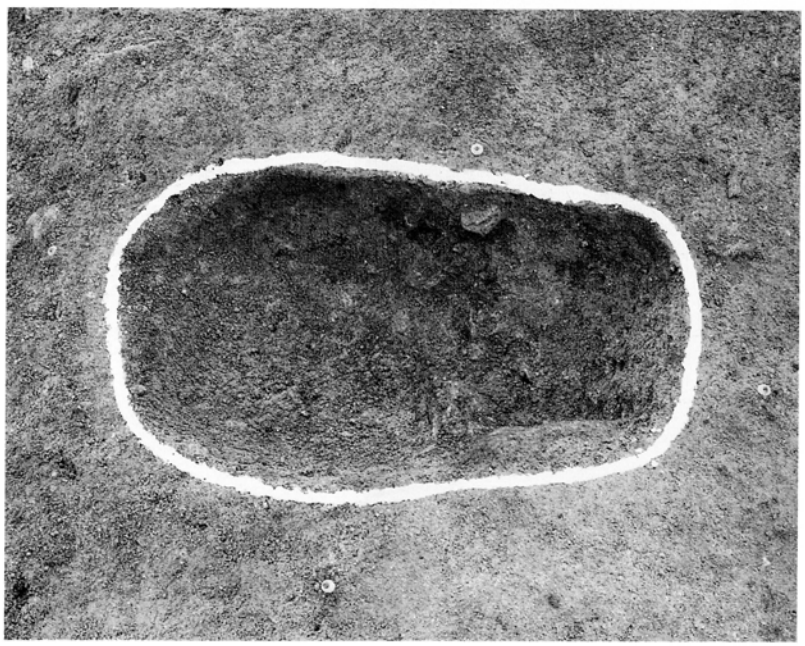
(3)A区SK 008(北から)

脇山Ｂ遺跡



(1)A区SX 001(西から)

(2)A区SX 001 土層(北から)



(3)B区SK052(北から)

図版 4

志水A遺跡

(1)A区全景(上空から)

(2)B区全景(上空から)

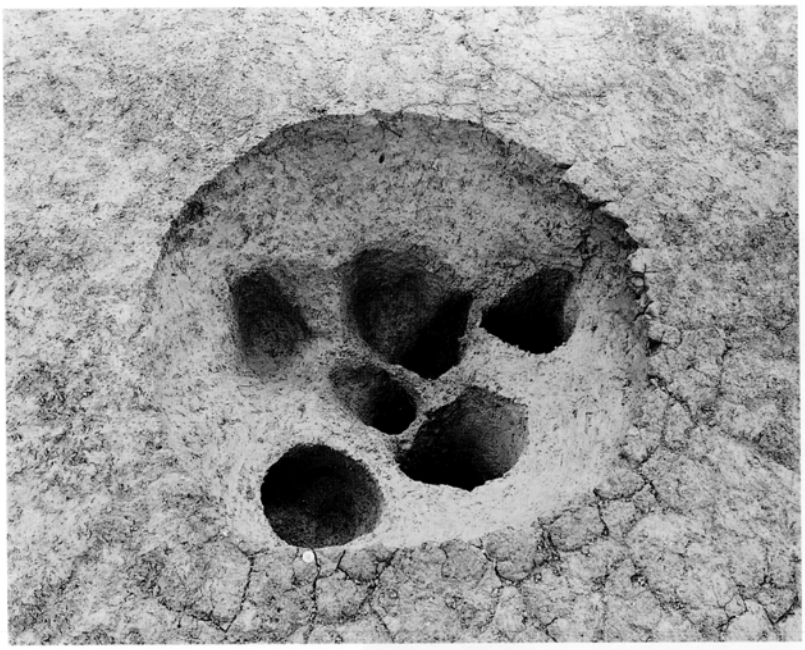
志水A遺跡

(1)C区全景(南東上空から)

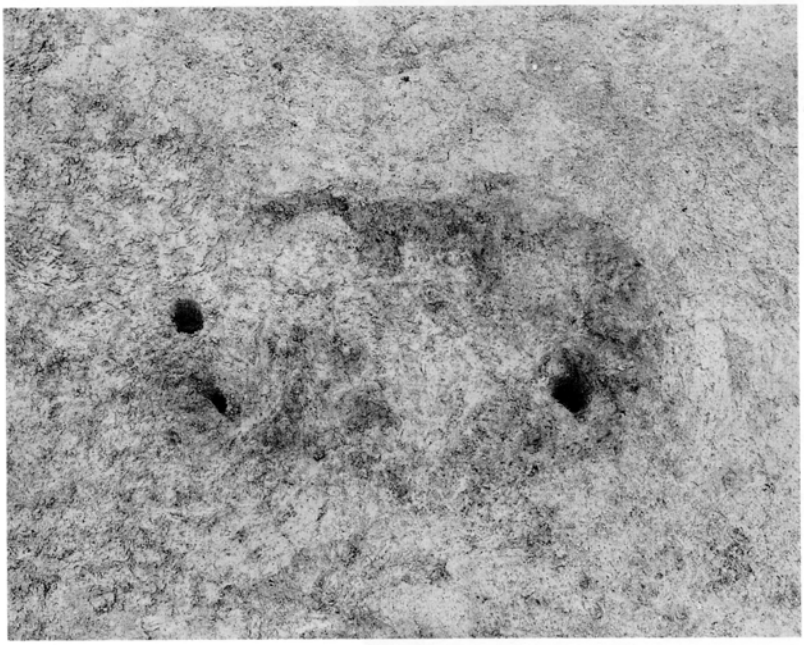
(2)D区全景(上空から)

図版 6

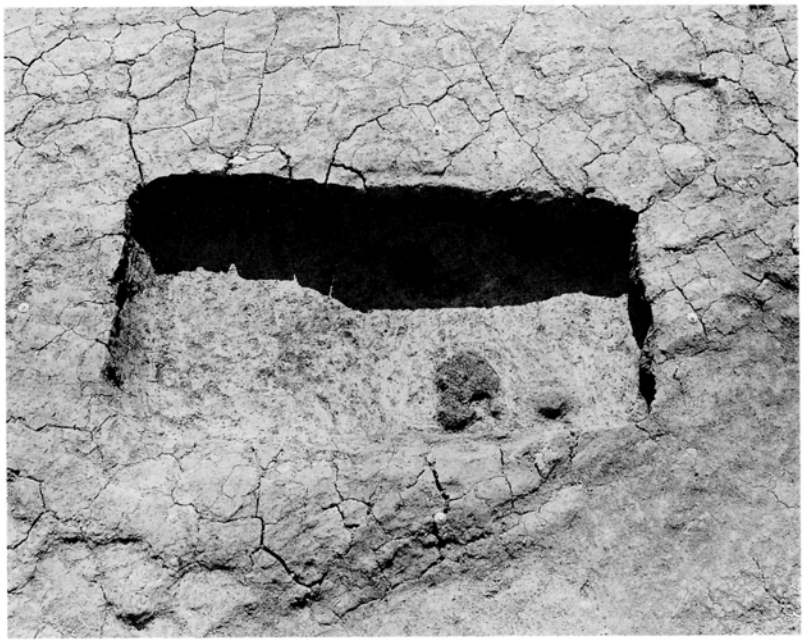
志水A遺跡



(1)A区SK 051(西から)



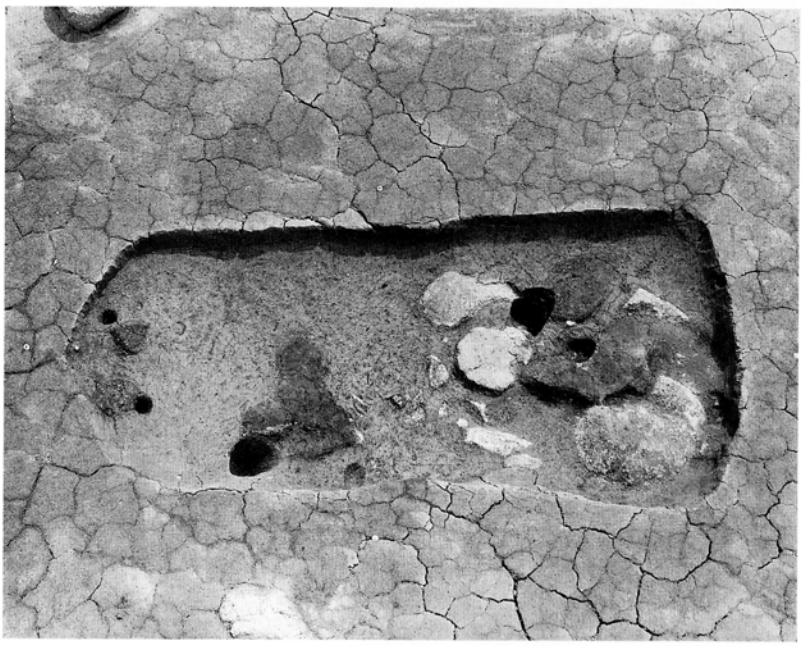
(2)A区SX 052(東から)



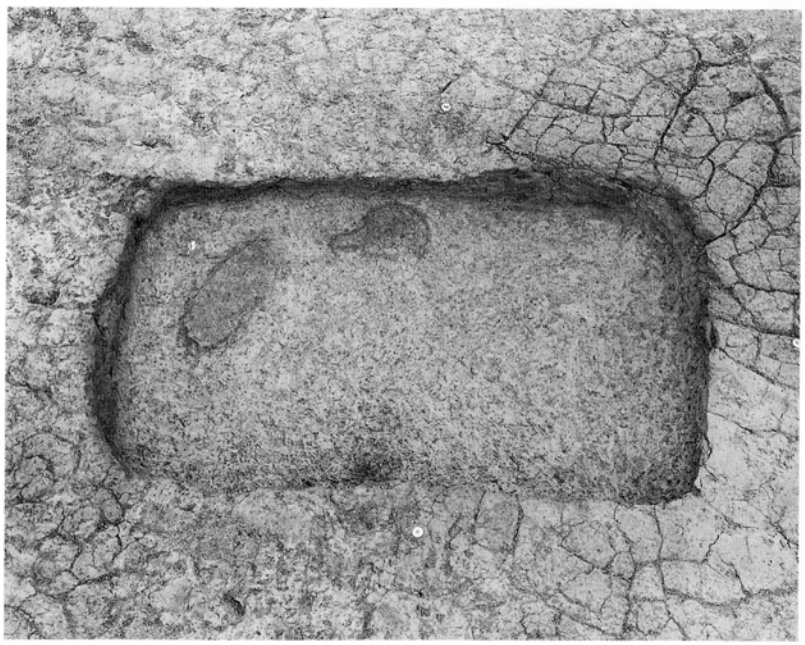
(3)B区SX 003(西から)

志水A遺跡

(1)B区SX 006（南から）



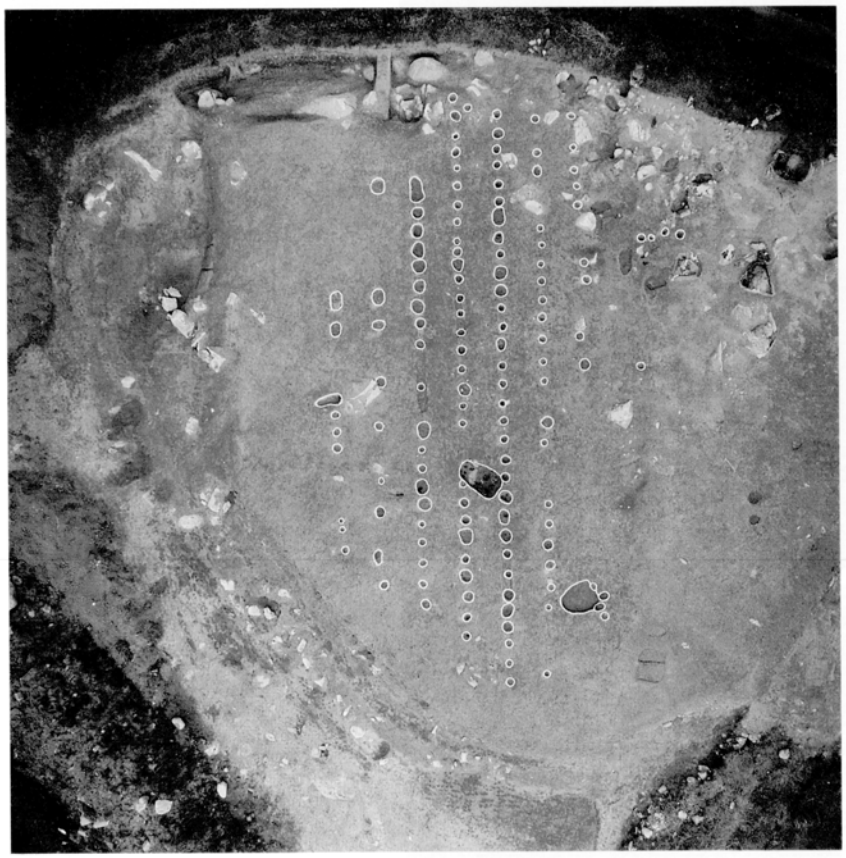
(2)B区SX 007（西から）



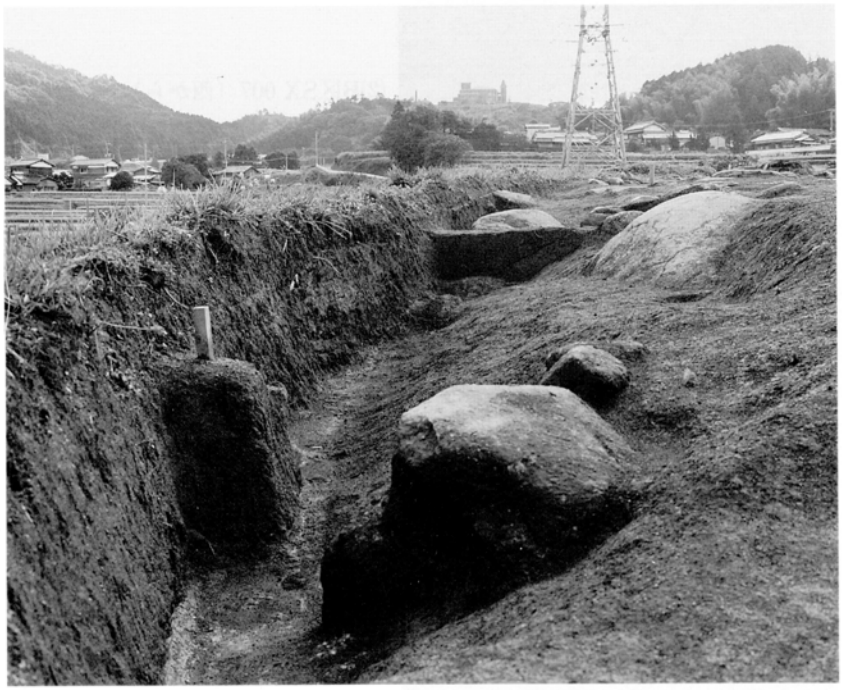
(3)B区SX 010（東から）

図版 8

志水A遺跡



(1)C区SB 101(上空から)

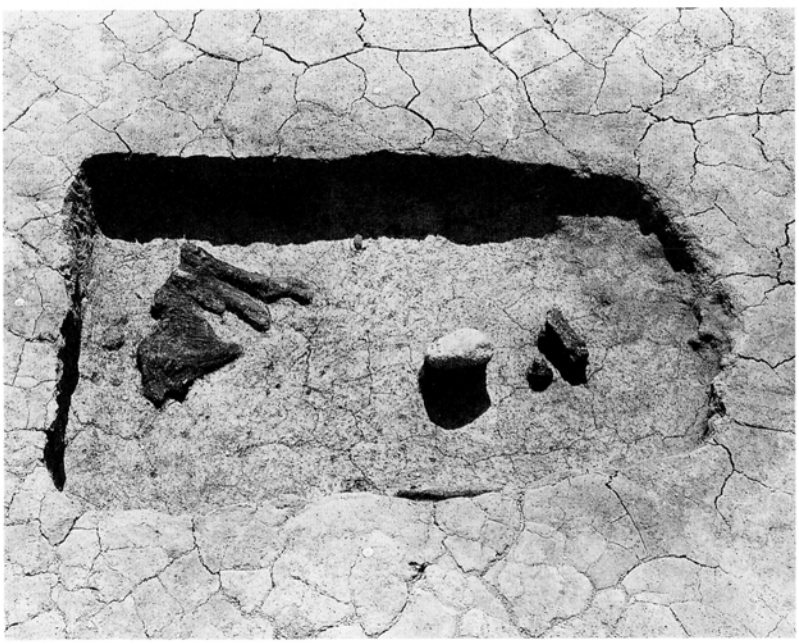


(2)C区ST 103(西から)

志水A遺跡

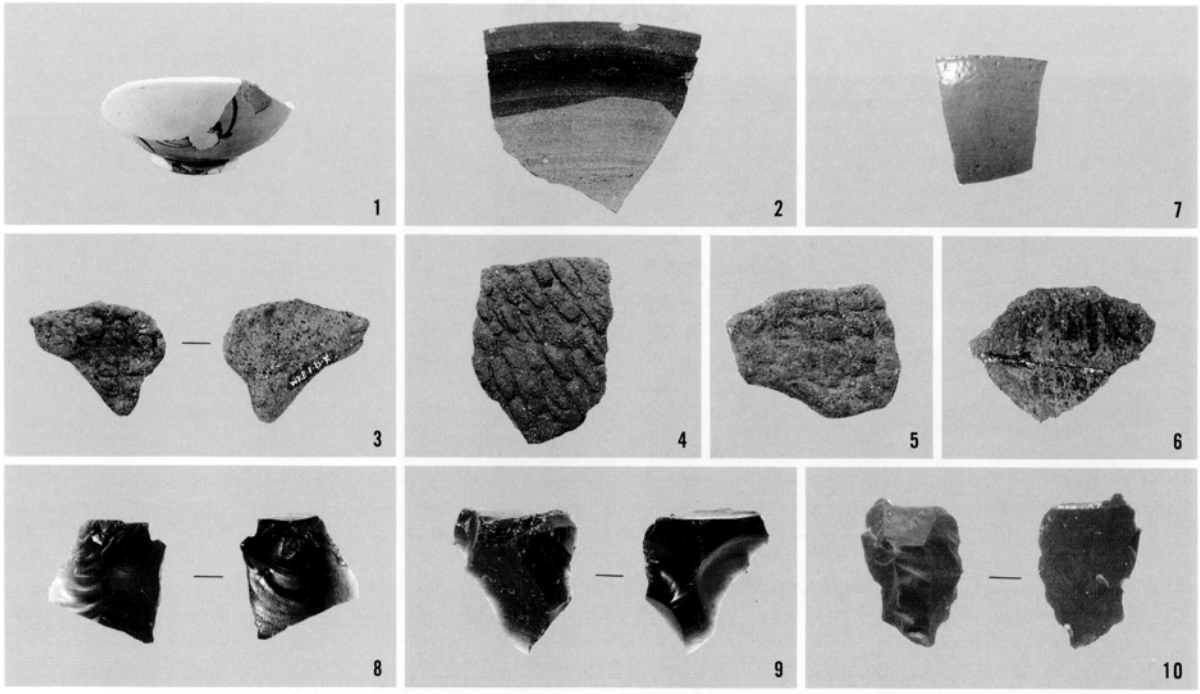
(1)C区SX 102(西から)

(2)D区SX 151(北から)

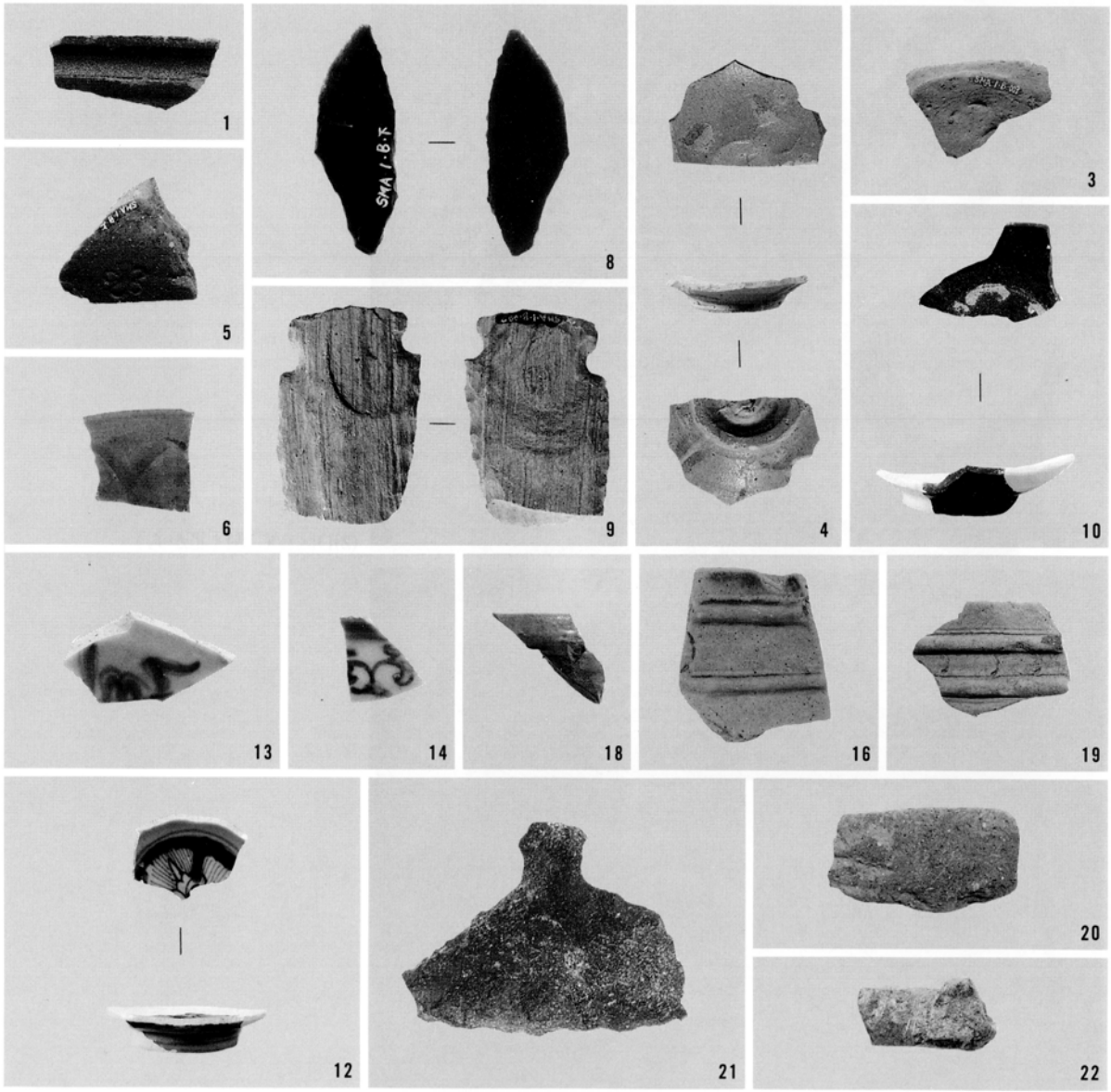


(3)D区SX 152(北から)

図版10



(1)脇山Ｂ遺跡出土遺物



(2)志水Ａ遺跡出土遺物

小笠木（おかさぎ）

—脇山B遺跡第1次、志水A遺跡第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第425集

1995年（平成7年）3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 祥文社印刷株式会社

福岡市博多区博多駅南4丁目15番17号